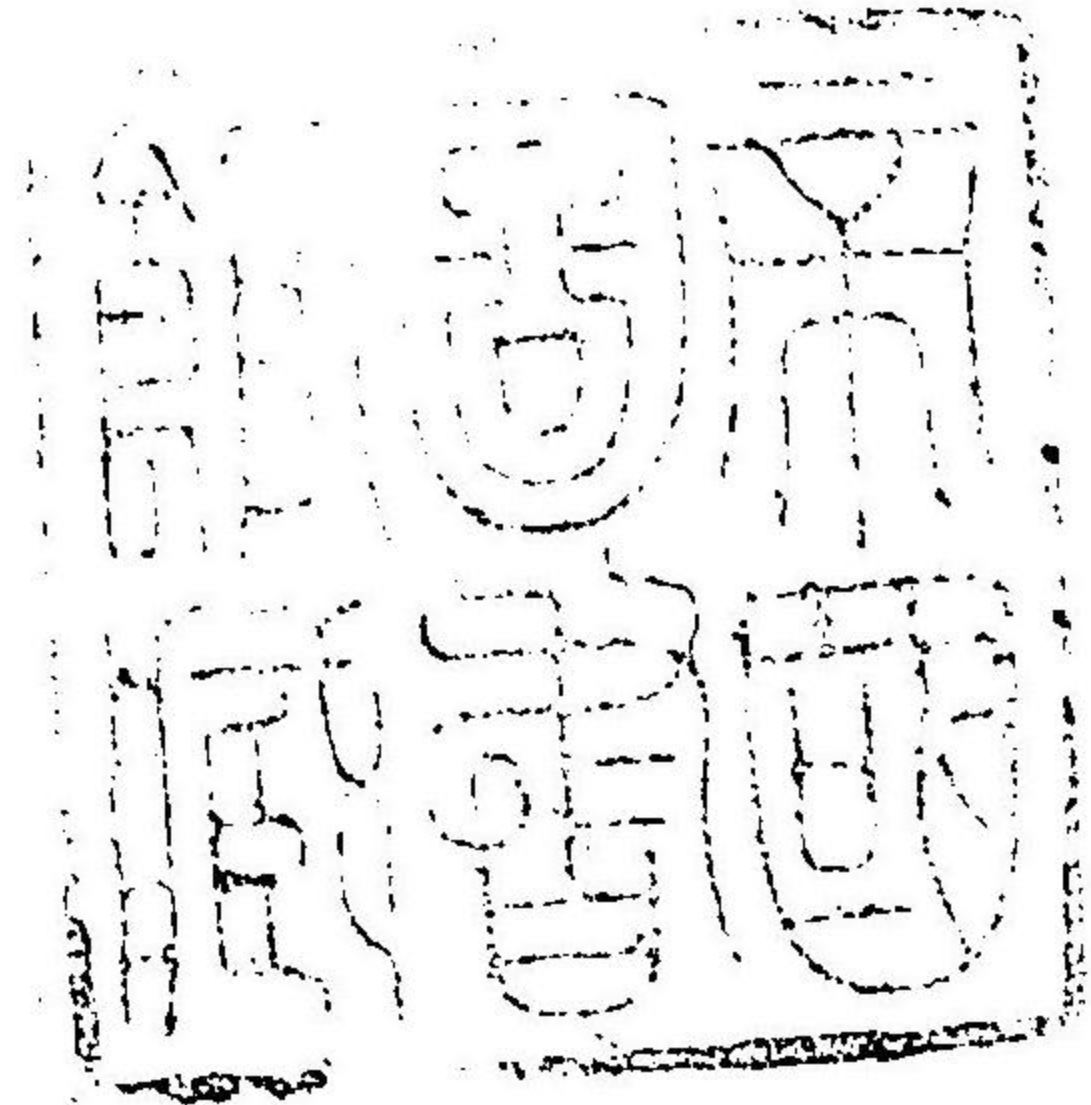


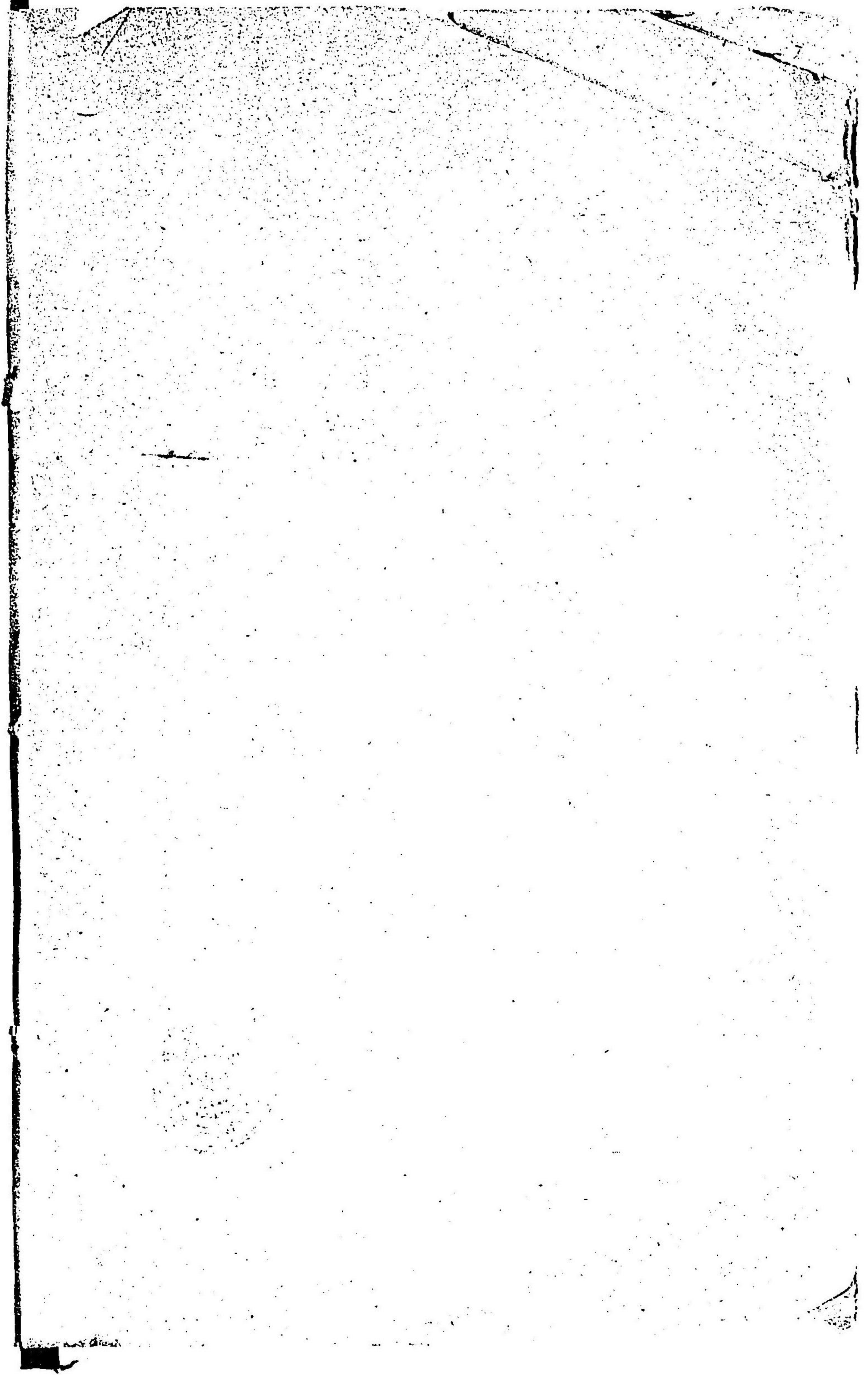
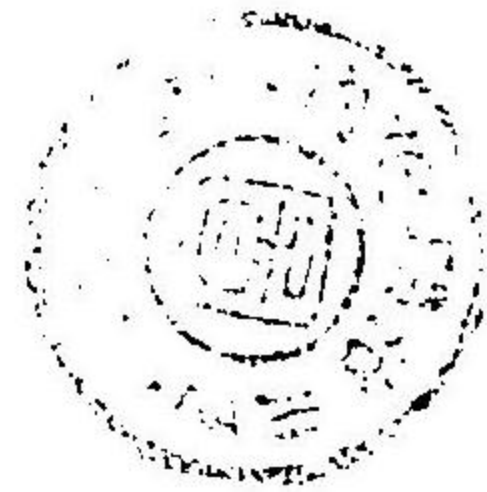


金毘羅  
利生  
田宮の仇討





Vertical text on the left side of the page, likely bleed-through from the reverse side. The characters are small and difficult to read, but appear to be organized in columns.









439  
398

(一) 討 仇 の 宮 田

利金  
生記  
田宮の  
仇討



○ 第 一 席

武原魯生口演  
河合源三郎速記

きい今道より私に申上る、御話は少しく古いようござい升  
けれど、誠に面白い者ですから、此村鉄英堂主人に頼まれ升  
て、伺い升、此の田宮の仇討と申上るのは、田宮坊太郎の實傳  
でござい升、是は芝居や浄瑠璃の方では、花野上野櫻の石碑  
と申上て、今でも東京、下谷區、谷中、櫻木町、青龍院、と申  
升る寺に、空心大徳の墓、横手には田宮小太郎國宗、と彫て  
さい升、中々立派な者です、そこで、是はどう云う發端だと申  
升と、爰に紀州名草之郡和歌山、五十五万五千石、紀伊大納言



討 仇 の 宮 田 (二)

光信公の家老に、同國新宮で一万八千石、四ノ宮甲斐之守と云う人が有り升、此の四ノ宮甲斐之守の妾腹の二男で源八郎と云うのが有り升、然る處が……此源八郎は妾腹の二男ですから、肥前の唐津に田宮村と云う處が有つて、爰に小田宮流の名人、田宮藏主と云う先生が有り升、是へ源八郎は養子に参り升た、是が、坊太郎の父でござい升、……然るに此の源八郎は生れ付てより、武藝が大變に好きです、尤も武士に生れ升たからには、文武両道は車の両輪と申升て、どうでも學ばなければ、なり升せん、國亂れ升る時は武を以て治むる、また國納まり升時には文を以て教ねると云う、だから武士に生れたれば、どうでもやらんければなり升せん、併し中々文武両道共に、出来るよ云う人は少ない者です、處が……此の源八郎は、好む道ですから一生懸命養父に付て、修行致し升た、から……餘程出来る様

討 仇 の 宮 田 (三)

になり升た、すると此の源八郎が廿二才の時でした、養父藏主は、病を以て死くなられ升た、故に源八郎が養父の跡を、相続するとになり升た、然ると爰に騒動の出来升たのは、源八郎の養父、四ノ宮甲斐之守と云う人は、誠に心根の善くない人ですつまり主家五十五万五千石を、押領しよと云うのです、すると大公儀より、紀州家の附家老と致し升て安藤帯刀と云う人が有り升、そこで、御家押領しよと、云うのには、此安藤帯刀と云う人が、萬事政權を握つて、居られ升から、此人が邪魔になる依つて種々と殿様にさん言をし升た、けれども、中々行きません仕方がない者ですから、亂暴にも殺害に及ばんとして、やり損じ升たトウ、ウレが爲めに、四の宮の家は改易になり甲斐之守は切腹しなきやならぬと、云うとに成り升た……考へて見ますれば、昔しからむはんを起して、それが首尾よく成就する……



……アナとはあり升せん、なにも他のつまらない、三百石や五百石の、侍士のことを思へば、一万八千石貰つて、いたら結構な者です、……どうも怒のない人間はないとは言ひ乍ら、餘り怒が深すぎるから、遂には家も潰れ、人にいはん人と言われ、己れが大事の命を捨てんければ、ならぬ様などになるのです、すると源八郎は此の事を肥前の唐津で聞き升た委しいとは譯り升せんが、安藤の爲めに家は潰れ、父は切腹をされたと、云うのですから……捨て置かれ升せん、假令どうあろうとも、家と父の仇であるから……、どうでも、仇討をせんと云うので、俄に肥前の唐津田宮村の道場を片付けて、直に紀州和歌山へ、出掛けて参り升た、……ソレカラ源八郎は、どう云う譯で、斯かる騒動になつたのか、何か譯がなくば、只無暗に安藤が父を殺した譯では有るまいと、思ひ升たから、内々で聞合して見ると……

……中々仇討處ではない、主家を押領しよとして、やり損じ夫れが爲めに、家が潰れ、腹切たと云うのですから、うれならば當り前である、未だ切腹位ひで済んだら結構、轉り首になつても仕様がなないのである、是は仇討とは思ひも寄らぬとであるに依つて思ひ止まり升しうと、源八郎は誠に賢い人ですから、仇討のとは断念し升た、是から源八郎は歸るかと思ひ升たが、折角……爰迄来たところであるに依つて、暫く諸國を廻つて、武藝の修行なし、又實家養家の家を、立てんければならぬと、是から和歌山を出て、大阪へ参り升た、……うれで今、川口へ参り升と、何だか大勢の人が、ガヤ／＼騒いでいる様ですから、何で有ろうと、聞いて見升と、今金比羅船が出るんだと云う、だから源八郎は幸ひ金比羅船を信心して升から、フト、参詣する心になり升た、うれで其船の胸の間へ乗込み升た、うれで、モ、ヒ



きに船は出升……

そこで、一寸私しが申して置き升が、中々其時分の金比羅船と云う者は、實に不完全な者でしたナ……やゝもすると難舟します、だから誠に心配です……別に難舟するのは金比羅舟計りではござい升せん、この舟でも其通りです、が……其段今は結構な者です今は、金さへあれば、どこへでも行かれ升一寸着物を一枚着て、下駄ばきで、歐米各國が、見物してこられ升、……魯生の様な講釋師でも、行てこられ升、……尤も金は有りませんけれども、「ハッ」……と云う氣笛が鳴たら、ゴーく……今爰にいかと思つてると、直に十里や二十里は向うへ行つてると云う、昔しのを思つと、ぬらい遠いのです……

左れば、誠に海上は無事で、ござい升たから、イヨくモ、

今日は、丸龜に着すると云ふ、だから乗合の人は皆お互ひに脱び升た、△「エーあなた、誠に結構でござい升ナア……、□「サア是と申し升るも、金比羅様の、御利益でござい升シヨ……△「へー私しも左様に思つて居り升ので……へ……、また妙なことを御尋ね申升が、あなたは、何處の御國です、□「へい私しですか、私しは駿河の國です……、△「ソレヒや、あなたは駿河ですか、すると私しの國と、隣り全志ですナア……、□「それでは、あなたは何處です、△「私しは甲州です……、□「ア、甲斐ですか、こりやどうも、それでは、甲州の御方、いろくのとを尋ね升ければ、甲州には澤山名物が、有ると云うとを聞て居り升が、全体どんな者があるのです……、△「そうです、私しの國の、自慢をする様ですけれども、……甲州には、随分名物は有り升ナア、先づ第一番には甲斐絹と云つて、絹は名物です、……それ



討 仇 の 宮 田 (八)

から、甲州葡萄と云う、また、甲金、甲州蟹と云う、此の甲州  
蟹などは、大變に大き者ですナア、マア日暮方に、一疋蚊帳の  
中へ、入れて置たら、うれでモ、行燈は、いらぬと云う位ひ  
です……、ロヘイ……大きな者ですナア、△それから、まだ、  
あなた甲州には、日本一と云ふ者があり升、ロウリや何です、  
△富士の山です、是が日本一でシヨ……、ロア、モシ、富士  
の山と云う者は、日本に、二ツも有り升か……、△あはらし  
富士の山が、何の日本に、二ツ有り升者かいナア、日本一と云  
ひ升から、一ツに決つて升、ロそんなら、どう云う譯で、甲州  
に富士の山が、ござい升、△どう云う者で有ると云う、有るか  
ら、有ると云ひ升のデ……ない者を決して、有るとは云ひませ  
ん、ロヘイ外の國の者なら、とに角、私しは駿河の國の者です  
せ、少しは向う先きを見て、物を仰つしやい、△どう云う者デ

討 仇 の 宮 田 (九)

……、ロ富士の山と云うたら駿河の國の、者に決つて升△うん  
なを言うても、山は甲州に、七分か、八分か、ツツて升△假令七分か、  
ツツていても、八分か、ツツていても、それは何にもならん、表大  
宮口と云うのは、駿河に有り升、富士の山は駿河の者と云うと  
は、ギヤツと生まれな、赤ん坊でも知つて升、ヘイ、ソナ馬  
鹿などを其仰やい升な、人が笑ひ升せ、ほんどに……、△ソナ  
とを云うたかて、甲州の者です……、ロそんなに、あなたが強  
情を仰しやるなら、幸ひ大勢の乗合の人が、居られるから聞て  
見たら分るとちや、……、エ、皆それに御出になる、大勢の御方  
に御尋ね申升が……、富士の山は駿河の國の者でしよか、甲州  
の者でしよか……、したら大勢の乗合は口々に、駿河々々駿河  
ですぜ……、駿河々々皆駿河です、だから駿河の人は大いばり  
どうしても、甲州の人は負けです、仕方がないから△エ、それ



では駿河へ上げ升……、ロエー貫ぬいでも、初めから私し處の者です、……と丸で己れの、富士の山の様に思つて居升、するとまた甲州の人は△富士の山は負け升たが其代りに、甲州には、ぬらい名將があり升せ、□ぬらい名將で、どんな方です、△左れば、甲州は山梨之郡新甲府入ッ花形の城主、武田大膳の太夫從五位之下、兼信濃之守、源之朝臣、晴信入道、徳榮軒、法性院、大僧正、機山信玄、大居士、と云う、甲州流の軍學の名人です、□ウツアツ、そりやなんです……、△名前です□長い名ですなア、いや分り升た、うれば、法性寺の入道前の關白太政大臣の先祖ですか……、△そんなと、有り升者か、何しろ、かなで書くと名前丈で、百三十六字程あり升、□ぬらい者ですなぬ……、△そりや、モ、ぬらい處では有ませんナ、あの川中島の戦争どうです、彼れ位ひな、上杉ですら、坊主頭を抱へて、

逃たと云う位ひですから、……□へエー、すると、彼の川中島の戦争は、やつぱり、上杉が負けたのですか、ぬらい者ですなア……と云うてると、其の、まわ隣りに乗っていた人が、○若し御中言ですが今お話しを聞いてい升と、信州川中島の戦さで上杉が坊主頭をかへて、逃たと仰しやい升た子エ……△へい、申升た、○いつ上杉が坊主頭をかへて逃げ升た、若し私しは、越後の者ですぞ、他の國の者なれば、とに角、越後の者が、そんなとを聞ては、なまつて、いられまへん、△そんなと云たかて、逃たに違いない○ナニ逃やしなさい△逃た……○シよ、逃げたか△逃げた○ヨシ、逃げたか、逃げんか、それが今謙信、己れは、今信玄になれ、川中島の戦争であるけれども是は舟の中だから、舟中島の戦争だ、サア勝負しよ……と云うので二人が、立上つて、双方組討を始め升た……、したら、組



頭さもを漬した、  
コレ、オイ、オイ、舟が沈でしまうがナ……」と船頭はヤア  
と云うて居り升、……すると、最前から胴の間に乗て居り  
升たる、源八郎は、是を見て、誠に面白がつて居り升た、……  
すると船頭は、大きなこへで、エー御客様モ、九龜の小富士  
が見え升たから、御支度を願いとう存じ升と云ひ乍ら、茶と香  
の物などを、それへ、以て出升た、するとモ、舟が付くと云  
う者ですから、漸々、喧嘩中止しました、うれで、一同は皆、  
辨當をたべるとになり升た、……すると、爰に一つの、騒動が  
出来る云う、田宮源八郎、饑らきのお話し一寸一ふく、致し  
て申上ます……

○ 第 二 席

倍て、一同皆辨當を喰て居り升と、今舟の、とももの方に何處の  
侍士か分りませんが、三人の侍士が、今舟頭の以て参り升た、  
香の物を、喰て酒を呑んで居り升、すると、其側に、年頃五十  
位ひ坊さんと、十二三の小僧が、重箱の中から、煮びを出して  
御飯をたべて居られ升、するのを、三人の侍士が見ました……  
甲「オイ……エライ、味そうな、ナア、香こに茶漬と云うから、  
飯喰のには、香はいらぬ者で有る、酒に香と云うと有るから  
酒を呑むのには、香がなくては、都合がわるい、一番あの香を  
取てやろをぢやないか、乙「うりや、よかる、併しどう云う工合  
に、取るのだい、甲「そりや、それが、よい様にする」と云うの  
で、一人の侍士は、件の出家に向つて、甲「エー今日は誠に、結  
構な天氣でござるノウ、惣左様誠に有難いとでござり升る……  
御見受申升れば、あなた方は御酒お上りでござり升るに、私し



は御側に有つて、飯を、喫して居り升る、甚だ失禮ではござり  
升るが、何と申すも、出家の身の上、平に御用拾に、預りとう  
存せ升、甲ナニく左様御断りには及ばぬ、サア和尚一はいや  
り給へ……と盃を出し升た、是はとうも賊に有難う存せ升る  
が……何分に五戒を保つ出家の身の上、釋尊の禁戒を破却致  
しては、なりませぬ故、よろしく、御断申上りでござり升、甲  
ヤ和尚、うんな、へちむつかしいと申す者でない、うんなと  
を言わせど、一杯だけやり給へ、折角差した者であるから、坊で  
はござり升ければ、其儀計りは、よろしく御断申升、甲それ  
では何と申すても、お上りにならぬか、坊頂させせん、甲いよ  
く、お上りにならぬか、……是れ和尚爰では、そんなを言  
て居るけれども、寺へ行て見よ、寺へ行けば、大黒と云うて、  
女を置く、又盤若湯と申して、酒を呑む、玉子を御所車と申す

たにしをげんこつと云う、皆そんなを申して、中々五戒を保  
つ處ではない、……だからそんなを云わせに、やり給へ……  
坊是はしたり、他の出家は、左様なることをされ升るかは存せま  
せぬども、愚僧は決して、そう云うとは仕りませぬ、甲それで  
は何と云うても、お上りにならぬか、……イヤサ呑ませぬか、坊  
頂させせん、甲いよく呑ませぬとあれば、仕方がない拙者も侍士  
だ、一たん差した者を、其儘跡へ引くと云う譯には相成らん、  
……サア、腕づくだ……坊左様御無体を……甲ナニ何んだ、何  
が無体だ、呑ない者なれば、とに角、呑る者を呑りと云のに、  
何が無体だ、侍士たるべき者が、一たん言ひ出したからには、  
跡へは引かぬ、……呑まなキヤ……其の各々、手傳い給へ、口  
を裂いて呑してやるから……と亂暴にも三人の侍士は、今和尚  
を取て押へて呑まそうと云う、少しく當てが外れ升たから、怒



つてるのです……、すると大勢の乗合の人は、是を見て、口ッ  
ンく大變なとになり升たねへ、……、だれか仲裁をしてやらな  
キヤ、殺され升せ……、はんどに△ければあの坊主も坊主やな  
ア……、春だらどうです、一杯やそこら、私しやつたら、彼の  
風軍皆、空けてしもをやるのに……、口私が仲裁して上げ升う  
と、思てるけれども、相手が侍士だから、中々町人位ひが、い  
つた、處があかん、賊に氣の毒だ……、だれか仲裁する人が、な  
いか知らんどあたりを見れば、厠の間に一人の侍士がい升……  
是れが田宮源八郎です……、うこで、町人は此侍士に頼んで上よ  
うと、思ひ升たから、……、漸々それへ参り升て……、口エー賊に  
どうも、早御見受の通り御出家が御氣の毒でござい升……、あ  
のあんばいで捨て置き升ると、殺されて、しまわれ升、どうか  
仲裁して、あげて預く譯には参り升まいか……、口イヤ、如何

にも氣の毒である、左様なれば、御仲裁して上げようとは是から  
源八郎は、丸腰になつて、今といの方へ参り升た、……、口アイ  
ヤ暫く、エーやつがれば、御同船致し升たる侍士で、御さり升  
る、只今承り升れば、御武家は一たん、差した杯は跡へ引かぬ  
と云う、又出家は五戒を保つ身の上であるに依つて、御酒頂くと  
は相成らんと云う、……、双方共に御尤も、故に、御両所の御顔  
の立つ様、其御盃は拙者が頂戴致しどう存じ升、左すれば、と  
が丸く納まるであらうと考へ升から……、口ナニツ、其方が仲  
裁しよと云う、生意氣のとを云うな、見れば未だ、……、若年者  
の分際にて、未だ玉子のからが、けつの前に、へばり付ていら  
ア……、控へ居れツ、たつてと申さば、其分には捨置かぬぞ……  
してゐる、者ですから、聞きそに、御座いません、……、何分に酩酊  
仕方がな



いから、源八郎は其儘で、歸てしまひ升た、すると大勢の町人は〇もし何です、ありや、けんつく喰つて歸て來升たぞ、けんつく喰つて、歸る位なら、始まりから、行ぬ方がいゝ、うんな仲裁なら、だれでもする、……つまらない奴だ……」と口々に言うて、居り升のが、源八郎の耳に、遁入り升た……成程是は町人の、云うのは尤だ、目の上の塵は、拂はなければならぬ、……然れば、モ一へん行てやろうと……、再び出掛けて參り升た、今度は帶刀して參り升た「アイヤ……暫く、甲ナニツ……又參つたナ……何だ且左れば御見受の通り、拙者も斯く、兩刀を帯して、侍士の身の上、浪人とは申乍ら、侍士は侍士一たん、仲裁をしよと、思ふたらば、何處迄もする、イヨく御聞届なくば、是非に及ばぬ、腕づくで仲裁をし升、甲ナニツ腕づく……、イヤ面白い、腕づくで、やれるなら、やつて見ろ

と言ふなり、一刀を取つて抜き討に、切り付け升た、あつと云う内に、源八郎は早くも、体を變し升た、……源八郎も長物を抜こうと思ひ升たが、船中のご故、若し乗合の人に怪我、さしてはならぬと、考へ升たから、……幸ひ腰に帯して居り升た、鐵扇を取て、相手を致し升た……、再び切付けて來る奴を、引外して置て、一と討小手を討たから、堪り升せん、アツ……と云つて刀を落したから、幸ひひばらと、一と當て當て升たからアツ……と云つて倒れ升た、……すると、是を見て居り升た、二人の奴は、己れッ怪しからぬ奴だ、浪人の分際でと云うなり一刀抜き連れて、切込み升た、するのを源八郎は、飛鳥の如くに働き升て、見る見る間だに、右と左りへ、打倒し升た、……實に、宏大なる腕前です……それで一同の乗合の人は感心し升た、すると源八郎は、別段にぬらい様なる顔もせき、元の胴の



間へ来て居り升た……、すると舟は、いよ／＼丸龜に着し升たから、皆上陸しまする、うこで三人の侍士は、漸々氣が付て、今陸つて参り升ると、源八郎が待て居り升……、田アイヤ、御武家と云われ升たから、一生涯命逃げ出し升た、うれで、源八郎は、不埒な奴であると言うので、立上つて二足三足、参り升たら、御武家暫くとして、袖をひかぬる人が有り升から、振り返つて見ると、最前の出家でござい升、田これは……先刻の御出家でござるか、坊はい先刻は、如何様に相成るかど、心配致し居り升た、處が御貴殿の御助けに預り升て、誠に有難う存じ升しテ御武家には、是から何れぬ、御出に相成り升るかは、存じませぬども……、恐僧當國丸龜の在、源養寺村の源養寺住職、林山、と申升る者……、誠に汚はしき處には候ぬども、一應御立寄、下され升らなれば、悦ばしく存じ升……是非御供を致し

升、田なにくそれしきのとに……、左様仰せられると、誠に迷惑を仕るから、よろしく御断申す……、御縁があれば、又伺ひませう、坊イヤくでは、ござり升らなれども、たつて御供を致し升と再三云われ升る者ですから、よんどころなく、此の和向に全道して、源養寺と云う、寺に参り升た、した位ひなら中々むさくろしい、處ではあり升せん、立派な者です……、うでしよ、かりうめにも、讃州丸龜拾八萬石、生駒殿岐之守様の、御菩提所ですから、……立派な筈です、サア源八郎は、是に参り升て、爰に暫く、滞在致して居り升た處から、計らせも生駒家、足輕奉公に住み込むと云う、一寸、一息入れ升て、直に申上り升……



借て是から、源八郎に於き升ては、林山の爲に命の恩人ですから、誠にいていねいに致し升、それで二三日滞在してゐる間に、象頭山にも参詣し、段々和尚と心易うなつて参り升た、から……

源八郎いろくど、身の上話しをし升たから、ろう云うとなら當生駒家へ、御奉公遊ばしたらどうです、幸ひ私の方へは、澤山に家中の人が、遊びに見入升から、御話しを、しましよ……

……と云うてる處へ、主エー和尚はお歸りになつたか」と言ひ乍ら退入て参られ升た、侍士一人、林イヤ、是はく土屋氏よくこそ、御出になり升た、サアくどうぞこちらへ、主イヤ和尚、今日は此間の仇討に参つたのである……、林是は又……

いつとも、御貴殿が御弱い者でござるから、御負けになる、是だ御氣の毒様……、主イヤ和尚今日は、此間の仇討だ……、是非止めを、差いて歸るのである、林イヤ、よろしい、左様な

れば又々、今日は愚僧が引導を御渡し申……と云う……、商賈々々でよく云ひようの有た者ですなア……、サア是から碁碁碁盤を、出して、マチくと、討始め升た、すると、源八郎は碁は至つて好きでござい升から、横合より是を見て、をり升た……、すると、源八郎などは、丸で段遠ひです……、今和尚や土屋の討て居り升るのは、ぞくに、ざる碁と申升て誠に下手です……、ろこで追々と討込で参り升ると、どうしても林山の方が目上手だと見へ升て、一寸勝手に、なつて参り升た……

するから、林山は……、林どうでござる土屋氏また愚僧の勝ですなア……、御投げなさいく主ナニく大丈夫、未だく是からだ……、ソレ和尚、爰をヨ一いついたら、どうでござる林ハア一すると愚僧は是を一目延し升るから、やつぱり勝です……、お投げなさい……」と云うてる處へ、主エー申上升、只



今大黒屋の御隠居が見へ升て、先日の石塔のどに付、和尙様に御相談申したいと云うて、見へ升た如何仕り升しよ……  
林「ハ、ア……左様か、それでは直に参り升、……エー土屋氏誠に中座をして失禮でござい升るが、一寸暫く御待ちを願ひどう存じ升、土よろしい、行ていらつしやい、林「誠に失禮……併し土屋氏下手の考へは休むに似たり、と云うとがござり升から、御ゆつくりと考へて置つしやい……」土屋は今々しい、とは思つたが仕様がな、土よろしい……と夫れで和尙は次に立たれ升た、さあそれから土屋はどうかして、勝てる處がないかしらんと、一生懸命考へて居り升ると、横合から、源入郎は是を見て……何分に段が違うのですから、よく譯り升……、あんないゝ處が有るのに分らんのか知らんと……思つて、思ひを……クツく」と笑ひ升た、したら、土屋は、ふと氣が付て見る

と、横合に笑つて……人……一生懸命に考へてるのに、横合からクツく笑う奴もない者だと思ひ升たから、云うてやろうとは思ひ升たが……イヤく左にあらき、クツく」と笑うからには基は上手と見ゆる……よし、聞てやろうと、土屋は振り返り升て、土イヤ誠に失禮でござるが、御見受の通り此の基は拙者の負でござる、いつとでも和尙に負る、誠に殘念で……モ、今日負ると、今後から和尙の相手には、面目なくて來られぬ、それに見て御出になると……岡目八目と申して、よく譯る者であるから、一寸一目丈け御教に預ると云う、わけに行きませぬか……、どうぞ御教を願ひたい、思つて致し升て拙者などは基は一向に心得ませぬ、土イヤく知らんとは云わし升まい、今それで……クツく」とお笑ひになつたからには、御存じないとはない……是非「ト手」といわれ升たから、仕方



がない、いやとは言われ升せん……田それではお教へ申すと言  
う譯でござらんが……、それ爰を……、コト一目おつきなさい  
……、すると忽ち一目のことで、御貴殿の石が生る、和尚の石が  
死地に入る……、どうで御座る……、主どこに……一目……爰  
に……成る……成程違くない、こりやどうも、拙者は此の隙迄  
気が付ていた……」となり気が付たて、何にもならない、主ど  
うぞ御内内にく」と言うてる處に、林山和尚が歸て見を升た、  
林「エー誠に土屋氏失禮を致し升た……、どうでござる、下手の  
考へ休むに似たり、よい處に御氣が付升たか……、主イヤ、  
和尚サアうれへお据わり、サア……爰へ一目ついたらどうで  
ござる……林「ナニくどこへ……いよ……是はどうも、ぬらい  
處へ御氣が付き升たなア、主サアく御投げなさいく」林「未だ  
く……ぬらい處へ……フーム……主どうでござる……和尚」

下手の考へ休むに似たり、拙者は厠へ行て参る……、依てゆつ  
くりと考へて、置かつしやい、をけばよいのに土屋は厠に行て  
しまい升た……、すると和尚は、いつでも勝てるとは言ひ乍ら  
負るのはやはりいやですから、振り返つて林「エー田宮氏誠に失  
禮でござるが、今拙者が九分通り勝てござつたに、僅か一目の  
とで負になる、誠に残念故に一才一目お教へ下さる譯には参り  
升まいか、それにお出になると、岡目八目と云うとがあるから  
すると源八郎は、侍士にも教へてやつたのだから、和尚にも教  
へてやろ」と……田「それでは爰をコトなさい……」と教へ升た……  
……林「成程……是はどうも、御内々に……」と云うてる處へ  
土屋甚五左衛門は、厠から歸つて参り升た、主どうでござる……  
……和尚「下手の考へ休むに似たりは……、林「先づ……うれへ土  
屋氏御すわりなさい……、エー是へ一目延したら、どうでござ



「……土ナニくどこへ……」フム……こ、こりや……ぬらい處へ御氣が付き升たなア……「サア土屋折角勝だと思つて安心して居り升のに、さつぱりワヤです……大源助です……仕様がな

々々基計りでは、ござらぬ、劔術も中々大した者……「實は拙者は此間大阪へ参り歸る途中、舟中にて是々ど、源八郎に助けて貰つた話しを、一々され升た……」林「そう云う次第であり升るに依つて、御當家へでも御奉公されたら、誠によろしかろと思ひ升が……」どうか御推舉下さる譯には参り升まいか……、土いやそう



は開升たから、是は誠に面白いと、思ひ升たから、田ナニく  
假令足輕たりとも、少しも苦うござい升せん、どうぞ御推舉に  
預りたし……、まうれでも、よろしければ、幸ひ私しの組下に  
明きがあり升から、それへ御遣入なさいと、イヨく源八郎は  
足輕に住み込み升た……、そこで此足輕てな者は僅かに食祿と  
云へば、四石二人扶持位ひですから、誠に不自由な者です……  
だから皆足輕は大てい、内職をして居り升……左もなくば中々  
女房子は養うて行かれません、けれども源八郎は何分にも林山  
和尚の命の親と云うのですから、万事和尚から世話して居られ  
升……、故に誠に結構で何不自由なく暮して居り升た、すると  
爰にお話しの御座り升のは或る一日のとでした……、源八は御  
役の歸りに、彼の侍士小路と云う所を通り升た、すると其の角  
の所に、年の頃なら十二三位ひ、立流な拵へして居る子供が、卅

五六位ひの、仲間の頭を下駄を以て、なぐつて居られ升、大人  
が小供をしかつてゐるのなら、よいけれども、子供が大人を、打  
すへてゐるのは随分、見悪い者です、だから、源八郎は是を見  
て、仲裁をしよと思つて、それへ馳付て参り升た……、田アイ  
やお坊ちやん、沓斬らしいと雖も冠の替りにならせ……、と云  
うとがござり升、其方がどう云うとを、致し升たかは存じませ  
ねど、私しが御託言を致し升故、御許に預りどう存じ升……、小  
よ、お前は何かや……、田新参御石抱へになり升たる、足輕田宮  
源八郎奴に御ざり升、小フム、田宮源八郎と云う者である、田ハ、ア  
余は城代家老生駒將監の忤、鐵太郎と云う者である、田ハ、ア  
左様なる御方と知らせして無禮仕り候段平に御用拾に預りどう  
存じ升……、鉄イヤく斷り云うには及ばぬ、是は予の家来文  
助と申す者である、今予が紙鶴をのぼしていたら、此の文助が



田宮の仇討 (三)

出て来て、厭ぢやと云うのに、無理に取つて、それく向うの  
近藤の、桃の木へ引掛けてしもた、それと云うたら、あんな高  
い所へ、引掛つたのは、取ると出来ん、無理なと云う餓鬼ぢや  
と云う……、主人を捕へて餓鬼とは何とである、それ故に、今  
なぐつて、やつたのである、且是はどうも……、そりや文助さ  
んどやら、御前が悪い主人を捕へて、餓鬼てなと、云うとは何  
とである、お詫言をなさい……、エー御坊様誠にどうも、御立  
腹は御最も、私じが成替り升て、御詫言を致し升、御勘辨下さ  
れ升なれば、代りに、素人張にて不都合で、御座り升るが、張  
つて御上げ申升から、どうぞ、それで御許しに預りどう存じ升  
鉄よーよ、源八貴様は紙鶴屋か……、且イエーく決して紙鶴屋  
では、ござり升せん、ほんの子供の時分に好きでござい升から  
張たところがあるので、ムー、そんなら張てをくれ、……、且そ

田宮の仇討 (三)

れでは誠に、むさくろしうござり升が、長家迄御出を願ひ升、  
御案内を致し升と是から、源八郎は足輕長家の御供なして、誠  
に大切にし升た……、待て御出遊ばす間だ、御退屈で有ろうと  
考へ升たから、火鉢の引出しから、掻餅を出て、お上申升た、  
それから、隣の井上の所に参り升て、提灯のひでに使ひ升る、  
竹を貫つて来て、是を骨にして、紙を張り升た、且サア若様張  
れ升てござり升……、が、字を書き升か、給を書き升か、如何致  
し升う、然乎は給は難ひぢやに依つて、字を書てをくれ、且畏り  
ました、うれでは……、何と云う字を書きましよう、鉄よーあ  
の龍と云う字を書てをくれ……、且宜敷うござり升と是から、  
源八郎は墨を充分に摺り升たが是位ひな者に書く筆がないので  
仕方ないから、臺所に参り升て、雑巾を取て来て、是を堅く  
巻つて、充分に握り詰め、龍と云う字を書き升た、處が中々源八



耶は能く書き升、是が御城代家老の御目に止まり升て、御城代の若様始め、家中一同の御子供に、手習ひの師匠をすると云う夫れが爲め足輕小頭に出世を致し升た……、萬事都合よく行つて参り升た、然る處が、月に村雲、花に風、と云う、假令の通り寛永二年八月十四日に御指南番、堀源太左衛門近恒と云者の未練の双に掛つて、倒れんければならぬと云う……お話し一オ一ふくの上、委しく申上り升

○ 第 四 席

借て源八郎は、今龍と云う字を書き升た、すると鉄太郎殿は、子供乍らにも、感心遊ばした。源八郎よう書くなア……と仰せられ升た、それから張を掛け釣合を付け升た、田どうぞ若様……工合が悪うござり升たら、何時でも御直し申上り、鉄太郎、上

げて見るワ、と云ひ乍ら、文助を連れて、表へ御田になり、御上げ遊ばすと釣合が宜敷うござり升たか、誠に高く上り升たから、非常に御悦びになり升た……、すると文助が……文エー若様、モ一やがて日は、西山に傾き升たから、御歸館の程を頼ひ升りになり升た、うれで今御玄關の片傍の處へ此の紙鷲を掛けてお置き遊ばした、すると暫くしてから、御歸り……と云う、今御城代は御殿より御さがりに成升た、家來は御玄關迄御出向ひを致すと、夫れに會釋をし乍ら、御上りになる、うれで、ふと、片傍を御覽になると、紙鷲が有る其紙鷲は、素人張では有るけれども、書て有る字が味い……生アイヤ是は鉄太郎の紙鷲で有るか……、△左様でござり升る生然らば鉄太郎を是へ呼べと仰せられ升た、すると鉄御父上御歸り遊ばせ生サ一鉄太郎此紙鷲



は、どう致した、然か父上うれば足輕の田宮源八郎が拵らぬてく  
れ升た生此文字は何者が認めれた……鉄「うれも源八でござりませす  
……御父上足輕でも、よを書てござり升なア……生ブーム、十  
八万石の御家廣しと雖も、斯程名筆なる者は又と一人もある  
まい……近衛御家流の手跡である……足輕とは申作ら是位ひ  
筆跡が見事であれば其方の手習の師匠がさせたい、併し大字が  
見事で、小さい字の書けざる者もある、依て……こりや鉄太郎  
予が云うたと云わきに、其方の腹からの様にして、扇子でも紙  
でもよいから以て參つて、詩でも歌でもよいから、書かして參  
り升る様に……うんなら御父上が仰つしやつたと云うたら  
いけません、あの私しの腹からですなア……かしこまり升た  
……是から鉄太郎は自分の扇子を以て、再び源八郎の處に御出  
になり升た、鉄源八は内かい……田「サ、是はく御若様御出遊

ばしまし、あの紙鷲はどうでござり升た……釣合が悪うござ  
り升たら早速に御直し申し升……鉄「イヤくヨチく昇つた……  
……アノナア源八……ナア源八田「何でござり升鉄「アノナ源八……  
……田「何で御座り升……鉄「アノ源八……アノ……ソヤく十八  
萬石の御家廣しと雖も、斯程名筆なる者は、又と一人も有るま  
い……近衛御家流の手跡で有る……と云うのや、ナア源八……  
田「うれは若様何でござり升る……鉄「アノ、か父上が、仰つたの  
やないせ……わしの腹から……やせ源八、此扇にナア、詩で  
も歌でも何でもよいに依て、書てをくれんか……源八は賢い男  
ですから……ハア、是は最前の紙鷲の字を見て……成程大字は  
見事で、小さい字の書けぬ者も有る、に依て試して見よう云  
うのやナア……と思ひ升たから……田「いや御よろしうござ  
り升……うれでは……御扇子をよござして頂き升……と筆を取



つて吉田兼好のつれづれ草をサラ〜と認め升た……、味いナ  
……田エー誠に御扇子をよごし升て、甚だ相済みませぬ……然  
ふーやとつぱり……小さい字もよう書くナアうれ〜やつぱり  
うやと思ひ升た……又あした来るせ……とて御歸りになり、  
父上には是を御見せ遊ばした……生實によく書てある……ア……  
誰かある……源八郎とやら申す足輕は何者の組下である……只  
恐れ乍ら土屋甚五左衛門の組下でござい升……生然らば甚五  
左衛門を呼べツと仰せられ、是から土屋に早速参り升た……生  
チー甚五左衛門……誠に御苦勞であつた、エー其方の組下に田  
宮源八郎と申す者が有るか……主如何にも御座り升……生彼等  
は實に感心な者で有るノ……是々斯様で有るに依つて、悴鐵太郎  
の手習の、手本を一冊認めて貰いたいのである……依つて早々源  
八郎を是へ全道致しくれる譯には行くまいか……主是はどうも

如何なる御用と心得升たが……、そう云うとなれば、早速に全  
道仕り升る……と是から土屋は感心して、足輕長家の源八郎の  
處に参り升た……、すると源八郎はちやんど、着物を着替て待て  
る……田イヤ是は〜御頭誠に懇々御苦勞様で……主源八貴様  
は是から……、何れか行くのか田イエ〜お頭の御田を待て  
居り升……へ、主それが……源八わかつてるのか……田う  
れ位ひなどは、モ一天門でわかつてる……主これ〜源八はら  
吹くナ……サア夫れでは早く行方、御城代御待兼であるから……  
……、是で全道して御城代の御邸へ参り升た……、直に御奥へ  
通つて参り升た……、生サア〜速處に及ばぬ……此方へ参れ  
ッ……誠に甚五左衛門御苦勞であつた、ア一源八郎と云うのは  
其方か……予は城代生駒將監である、田誠に恐れ入り升てござ  
り升る……主其方は中々名筆で有るノ……田是は誠に無筆で



ござり升る……生イヤ〜誠まことに面倒めんどうであるなれども、手習てなひの手本てほんを一冊いっさつ認しんめて貰もらいたし……どうぞ伴ばんの師匠しせうになつてもらいたい……と云われ升た……それで源八郎再三げんぱちろうさいざん断ことわり升た、けれどもたつてと云われ升るから、左様さやうなればと、御受ごうけけに及び升た……サア是こゝから甚お五左衛門ごさゑもんと御酒ごさけを頂いただきき升た、中々なかなか足輕あしかりであつたら、御城代ごじやうだいに御目通ごめとほりをするしよと云う様ような事は、當あたり前まへでは出来でき升せん、源八郎げんぱちろうは特別とくべつです……是こゝから生駒鐵太郎なまがまてつたろう様の手習てなひの師匠しせうする事ことになり升た、サアコゝなると家中うちやうの人々ひとが、皆みな此事このことを聞き升て、うれでは拙者しよせの伴ばんも、身共みどもの伴ばんも、某たがの伴ばんもと、三人五人さんにんごにん十八じゅうはちと、せんぐり源八げんぱちを頼たのみに参まゐり升、すると源八げんぱちも嫌きらいとは言いは升せん、一人ひとり教おしへるも五人ごにん教おしへるも同じおなひ事ことですから、皆みな教おしへる事ことになり升た、……モ一ひとううなると、足輕あしかり長家ながや位ゐひでは内うちが、せまいと云うので隣となりの近藤きんどうは家替かへ言い付けられ升た、

うれで一軒いっけんは裕ゆ吉きち場ばにし升た……それで全ぜんて手習てなひの師匠しせうでも町まち人の師匠しせうと違ちがつて、家中うちやうのですから、中々なかなか結むす掃はらな者ものです……何なに不自由ふじゆうなく暮くして居ゐり升たが……未まだ源八郎げんぱちろうには家内うちうちがない者ものですから、大變おほい急いそがしい……依よちて爰こゝに林山はやしやま和尚おんがうの世話よこごとで、一人ひとり人家内うちうちを貰もらつたのです……此こゝ源養寺げんやうじの隣となり村むらに鹽谷しほや村むらと云う處ところに百姓ひやくしやうの佐五右衛門さごさゑもんと云う者ものがある、爰こゝの娘むすめにお辻つじと云う、中々なかなか美人びじんです、是こゝが源養寺げんやうじが檀下だんげですから、林山はやしやま和尚おんがうとは心安こゝろやすい、それでイヨ〜お辻つじは嫁よめ入いれし升た……そこで、此こゝお辻つじと云うのは佐五右衛門さごさゑもんの、娘むすめかと云うと、實まことの娘むすめでない、是こゝは四國しこくで鬼神かみじんと云われ升た長曾我部ながそがべ元親もとちかの落おし胤むすねで、此こゝの佐五右衛門さごさゑもんは、佐五平さごごへいと申まをして、仲間なかまでした、それを今は、娘むすめにして養育やしよくをなし升た、長曾我部ながそがべは大坂おほさかにて討死うちじをしましたから、……うれが生駒家なまがまの御指南ごしゆばん番堀ばんぼり源太左衛門げんたさゑもん、の戀こひの意根いねになる、と云うのは



餘り此お辻が別腹ですから、家内に貰いたいと申升た……、す  
ると向うは御断り申升と云う……此方は水呑百姓、向うは五百  
石の御指南番身分がらう、釣合ぬは不縁の元と云ふとがあ  
るからと断わられ升た……するのをたつてうれでもとは言われ  
ない故に打捨て置たのです……夫れが戀の意恨で……爰にモ  
一一つ意恨をかもすと云うのは、或る一日のと源八郎は國分の  
八幡様へ参詣し升て、歸りがけ武者の小路を通り升た……する  
と其の角の御邸が二百石の近習で岡文次郎と云ふ人が居られ升  
今日は非番と見ゆ升て近習仲間計り、五六人集り升て、表座敷  
で御酒宴最中でした、岡はふと表を見ると、今源八郎が通り升  
た……源八の處は岡の悴は二人迄で世話になつてる、故に思  
や各々誠に御氣の毒でござるけれど、今表は通りしは足輕田宮  
源八郎、此間から、拙者の悴が二人迄世話になつてゐる、通り

掛つたのを幸ひ、禮がいふたいから……△ヤアうれはらうと幸  
ひ拙者の悴も行てる、此頃は源八のお蔭で手跡は申す迄もなく  
誠に行儀作法もよくなつた、呼でくれ給へ……口是はどうも某  
しの悴も世話になつてる……から、早く呼んで禮の代りに一杯  
呑してやろう……是から俄かに源八郎を呼びにやり升た……し  
たら源八は何だか分りませんけれど、御用だろと考へて参り升  
た、すると岡は△ヤア源八サア△遠慮に及ばぬ、スツと此方  
は△エー此間だより悴二人迄も其方の世話になつてる、一應  
禮に行かんければ、ならぬのであるが、誠に失禮を致した、幸  
ひ今通り掛つたから、一寸禮を云う、サアマア上れッ遠慮する  
には及ばん……△イヤ△源八郎拙者は久保田吉助である、拙  
者の悴も誠に厄介になつて……禮を云う……小ヤテ源八……拙  
者は小山村之丞で有る拙者の悴も、其方の厄介になつてる……



サア、盃を取する……ナニ、今日は苦うない……サア、  
やれ、く」とどうも源八は上々の首尾です……だから源八も誠  
悦び升た……すると爰に最前から、一處に酒を呑で居り升た奴  
は、赤川治助と云う堀の二番弟子で……御馬廻り役を勤めて  
食録は二百石貰てる……此奴は誠、酒がわるい……堀の二番  
弟子であるから、己れ程わらい者はないと思うてる、だから皆  
人に憎まれていよる……又赤川……己れに子がなから、元より  
源八の處に積古に行ていない……する者ですから……最前から  
むかついていゝるんで、立派な侍士が大体足輕風情の者に酒を呑  
し、ソレ源八ヤレ源八と、ていちよにする故に、怪しからんと  
思てる……だから……盃ヤイ源八……拙者は赤川治助と申す……  
……お馬廻り役を勤むる者である其方は大變手跡が、見事である  
そうぢやのう……、とれ位は手跡が味いと申しても、すは戦場と

云う時には何とする、手跡が味いからと申して、第一番に草紙  
の鍔を一着なし、硯の兜を着なし、筆の槍を小脇にかい込で、  
机の馬に打ち跨がり、ヤア、く一同の面々どて戦場に行けるか  
……ソ、云う時には、臨む事ではないが、此赤川は、黒糸絨の  
大鍔を一着なし全毛五枚綴の兜を猪首に着なし、南蠻鐵の小  
手腰當赤銅作りの陳刀をはき、黒毛の駒に打跨がり、ヤア、  
一全の面々、遠からん者は音にも聞け、近くは寄つて目にも見  
よ我こそは讃州香川郡九龜十八萬石、生駒謙岐之守の家來に、去  
る者ありと云われたる、赤川治助と云うは我事なり、イデー、  
我れと思ひん者は、我首取つて功名しろと、大音聲に呼わり乍  
ら、群がる敵の真中へ、表もふらむ具一文字、あたり左右の旗  
いなく、兜の天甲、八幡座、眞甲、眞時、小手腰當、和田髪、  
千段、二三の板、男龍女龍、志天、下垂、の嫌なく逃る者は、



後襲裝、或は胴切、車切、後口西行、眞二つ、見るく間に十  
騎廿騎の敵を討取る云う、夫れ位ひの者でなくば、常から買  
つてる食祿は何だ、其時の間に合ひされば、食祿盗人知行泥棒  
と云われても仕方があるまい、ドウヂヤ……源八と云われ升た  
から遣がの源八も未だ年は若し、ひとつし升たから、是は一番  
驚かしてやろうと、田イヤ赤川様の仰せは誠に御最もにござり升  
……私しも四石二人扶持の、足輕でござり升から、食祿盗人知  
行泥棒と云われぬ様に、四石二人扶持は心得て居り升、赤川  
にッ、ヤア、ぬかしたなア、四石二人扶持の足輕であるに依りて  
夫れ丈けの事は心得てると、人もなげの一言、怪しからん事を  
申す奴である、サア……とれ位ひな者か一番此赤川を相手にな  
して見ろ……是はしたる、赤川様には二百石の御馬廻り役、  
また堀様の二番弟子との御事、私しは四石二人扶持の足輕、何

しにあなた方に、御相手が出来ましょ……其義計りは、御許し  
に預りとう存じ升、赤川様、相成らん仕合をしろ、岡竹刀を出  
しとをくれ、岡おヨセ、赤川何故何故……赤川能く物を考  
へて御覽、そんな勝負したら損だ、假令どうでも源八は、あれ  
位い字が味い、けれども御城代の邸に呼ばれた時、何と云うた  
私しは無筆でござり升と申した、彼れ位ひに書ても無筆と云う  
位ひ……夫れに四石二人扶持の足輕でござり升から、足輕は足  
輕丈け知行泥棒食祿盗人と云われぬ様に、心得て居り升と云う  
すると余程出来るに違いない……万一お前が負て御覽……赤川  
や負やせぬ……岡負けやせぬ……成程負けぬが、勝つと自慢に  
なるか、ア、赤川様はぬらい者だ、足輕に御勝ちになつたと云  
つて、誰れが褒める、誰も褒める者はないがナ……万一負て御  
覽……人が何と云う、赤川はぬらううに、堀の二番弟子で有る



と云つて、いばつて居るけれども、足輕に負けたやないかと、云  
ぬれる、すると勝つて自慢にならぬを負て耻になる、そんなつまら  
ん事が有る者か……だからおよしと申すのだ……分つたか……  
赤ナニ……馬鹿な事を大丈夫だ……竹刀を早く……」と云うて居  
り升ると、此方はまた大勢が田宮に頼んで居る……「オナア田宮を  
うも常から赤川は己れ程いらぬ者はないてナ顔をして、いばり  
たをすのが、誠に、残念だ……から今日は少しく天狗の鼻の  
折れる様に、足も腰も立たぬ程、一つなぐつてをくれ……赤だ  
れだをれの悪い事云うてるのは……」  
「オイヤ、何にも云うてい  
ない……赤馬鹿にするな……皆が……サア源八今日は試合せね  
ば返さんぞ……たつてしろ……」  
「どうしても試合をせよと云われ  
升たから、源八郎も仕方がない、どうぞ、左様なれば、成丈け  
御手和かに御願申升赤左様なれば、ひどくは打たぬ……」  
「是から

岡が竹刀を出す所で……兩人は庭前に出て、試合することに  
なり升た、すると一同は皆縁側に出升て、此の勝負を見ると云  
う、今二人は支度をして、立上り升た……それで暫く位ひ取り  
をする……「ヤアツ、ヤツ、と云うなり、ボン、ボンと試合事  
十二三本……すると源八郎は腕に覺ゆる有る小田宮流の名人……  
……太刀先烈しく打込升たから……赤川たまらん段々後へ下つ  
て、しまいに垣根の所まで、下り升た……したら一同が「オイヤ  
何だい……赤川段々後へ下つて丸で、猫に袋を着せた様に、  
後へくくと下つてる……赤川々々モ、夫れより下れないよ……」  
△「ナアニ……垣を破りナ、するともつと下れるから……」と大勢  
が赤川を、馬鹿にする……赤川は一生涯命……大隅さけんで……  
……「ヤアツ……と云つて打込升た……充分に討た、討た事は討  
升たが……石籠燈を討つた……何にもならん、するのを源八は



やっ……と云うなり一つ、ヒシッ、と真甲を打升た……いくら  
強情の赤川も堪らん、あつと云うなり、とつとそれへ倒れ升た  
……がらり源八郎は竹刀を投げ捨て升て……且是は赤川様には  
御酒糺嫌でござり升るから、思ひの外の御不覺、賊に失禮之段  
平に御用捨に、預りどう存じ升……何分に源八はお子供を深山  
お預り申して居り升れば、今日は是にて御許しを蒙り升……と  
て源八は一同に挨拶をして歸り升た、したら後で大勢が……只  
赤川、赤川どうしたんだ、をい、をい赤川しつかりしろ……  
何だ其顔は青くなつてるよ……オヤ、赤川お前は赤川ぢやな  
いなア……青顔になつてる、ヨ、今日から赤川と云うのを止め  
にして、青がその治助と改めたらどうだ……音が馬鹿にする者  
ですから、其場にも、面目のうていられ升せん、だから其儘で  
コソくと歸つてしまひ升た、それから赤川も賊に殘念だから

……どうかして、此仇討がしたいと考へて居り升た、するど  
れから、五日計り立ち升て後に……源八郎は御役の歸りがけに  
彼の侍士小路を通り掛り升た……するど角が御指南番堀源太左  
衛門近常先生の御道場です……今日稽古日と、見へ升てポンボ  
ン、御面だ……お小手一本、としきりに竹刀の音が聞へて居  
り升……するのを源八郎はつい好む道でござり升から……す  
見を致し升た……

○第 五 席

今日は主人源太左衛門不在でして、代番の小谷團右衛門が稽古  
して居り升る、すると其小谷の傍に、赤川治助が凝つてる、治  
助は、ふつと、向うの武者窓の處を見ると、誰か人が覗いてる  
誰かと思ふと、なに此間岡の邸でなぐられ升た、田宮なんです



……赤兄さく 小何だ……赤それわれを御覽……小何だありや  
赤此間岡の邸でなぐられた、足輕田宮だ……小フームあいつに  
やられたのか……赤今日は先生がお留守であるから、幸ひ仇討  
をしてをくれ……小よし、ちや、つてやる……此方へ呼でお  
いで……と早速門人の加藤と云う者に云ひ付て呼びにやる……  
加これく左様なる處で、すき見をなしては相成らん……其方  
は何者だ……田ハ、ア誠に恐れ入り升てござり升、私は断參御  
召抱へになり升たる足輕田宮源八郎奴にござり升……加ハ、ア  
兼て聞てる足輕の田宮源八と云うのは貴様か……ちや此方へ這  
入て參れッ……なに、拙者が許すから……左様なる處に、す  
き見なしていると行かぬ……と無理に源八郎の袖を捕へて引入  
れ升た……それで今道場へ連れて參り升た……加エ、是が、御  
代番、足輕の田宮源八郎と申す者で、足輕ではござり升けれど

も、中々劍術は味いそうで……小ハ、ア、其方が田宮と云う者  
であるか……拙者は小谷圓右衛門と申す、當道場の師範代をす  
る者である……して其方は足輕では有るなれども中々武藝が出  
来るそうだの……又此間だは……岡の邸で、是に在る赤川が大  
變、打られたそうだの……と云うてる間に赤川は面目なうて、  
いられぬものですから……と、煙に成つて、どこか行てし  
まい升た……小今日は先生が御不在で有るから、それ位ひ出來  
るか、一本參れつ……田どう仕り升て中々私し風情の者があなた  
方にお相手は出來ません……小いや、くとも相手は出來まい  
教へてやるのだ……ひどくは打たんから……一本參れつ……た  
つてと云われ升た……から源八は考へ升た……モ、爰で八月の  
十五日、どうでも十五日には堀と仕合せならぬ……そこで、  
堀は、それ位ひ出來るか分らん、何と云うても、十八萬石の御



指南番で、四國で鬼神と云う評判ですから……出来るに違いな  
い……故に先づ師範代でもする位ひなら、三本勝負をするど、  
先生に二本迄勝たぬと、代番は出来ない、だから此の小谷と試  
合したら、大抵分からね事は有るまい……と考へ升た……うれ  
で田左様なれば何卒御手和かに御願申上り……小よし……ひと  
くは討たぬ……いよ……源八郎は支度して立上る……小谷は其  
儘で出る、源八郎は向うの腕前さへ分つたら負てやつてもよい  
……と考へ升た……双方暫く位ひ取りをしてい升、と出来る人  
と云う者はぬらい者です、別にボン……打合をせきとも、位取  
りで分る……今源八郎は位取りして、ハ、ア是位ひなら赤川と  
は少しは増した、併し是位ひなら大底分つてる……いよ……分  
り升たから、負けやろうと云うので……少しすきを見せ升た……  
……から小谷は「ヤッ」と云うなり討込だ、ボン……ビシッ……

……ヤッと烈しく打合て居り升た……する處へ堀が今歸つて來  
た、すると大變に烈しい、いよ音がして居り升から壘ハ、ア……  
……小谷と赤川がやつてるな、中々勉強してよるなア……と言  
乍ら、今入口から、這入ろうとするど、入口の片脇の黒板舞の  
節空の處へ顔を付て、己の顔が半分黒けになるのも、氣が  
付て一生懸命垂イヤーそれ……兄さしつかりやつてをくれや……  
……をれの仇討だぞ、よいかい……それ……味い……そこで御  
面だ……あ、お面だと云うてるのに、そんな男やな……それ  
……小手だ……ア、思う様には行かぬ者だなア赤川治助は夢中  
になつてる、堀はこれ、これ赤川、赤川……氣が付かぬから、  
赤川と少しく大きな聲で背中をばんと一つたゝいた……垂イヤ  
升た……壘なにつ、赤川、何が参り升た……垂イヤー先生です  
か……お歸りへ、……壘何にを左様な處でして、何だ其願は



……これくませると尙黒くなる本とうも恐れ入り升た、實は先生今足輕の田宮源八郎と云う奴と、小谷の兄とが、試合して居り升無ハ、ア此間を岡の邸で討たれた、足輕と小谷とが試合か……それで面目ないから、中へ這入らんのか、なに、勝つ負るは時の運なり、決して耻する事はないさあ、お這入りくと源太左衛門は直に赤川を連れて、兼て聞て居り升と、田宮の事ですから、幸ひ道場に参加し升た……すると源八郎はモ、負てやろと思つて、居た折柄ですけれども、一寸堀の顔が見へ升たから、全仕事なら、いやな負様するのとも思つて、小谷の横腹へ、だまつて一本突きを入れ升た……それが小谷は氣が付かぬ……それで源八郎は、馬参り升た……恐れ入り升た……したら漸々小谷小ア、参つたか……馬参り升た小イヤ中々足輕にしては、珍らしいものぢや、ムム先づ夫れ位ひ出来れば、今岡

三年修行して見よ、身共遠く及ばん様になる……源八は心の内で何をぬかしているよ……今でも遠く及ばんのだ……と、思つて居り升、そこで小谷は此方を向くと、いつの間にか、先生が歸つて居られ升、是は先生御歸り、何時御歸りに成升た無只今歸り升た……小ア、左様でしたか、一寸も氣が付き升せんでした……エ、先生、是は今度新参に御抱へになつた、足輕の田宮源八郎と申す者で、足輕ではござり升けれども、中々余程劍術は能く使ひ升……無フム其方が、足輕の田宮源八郎で有るか某は堀源太左衛門である、見知り置け……田誠に恐れ入升、私は新参足輕、田宮源八郎奴にござり升る、御留守の間に御道場の、御面倒を仕り升て、甚だ相済みませぬ……源八は御子供をお預り申して居り升から、失禮を仕り升る……誠に赤川様、小谷様……御免遊ばして……小ア、モ、源八歸るか、又折々には



遊に来るが、田有難う存じ升、左様なれば源八郎は歸り升た、跡で堀は小谷を奥へ招き升て無小谷今の試合はあれはどちらが勝だ……私しが勝……無どう云う者でお前が勝だ小どう云う者で、田宮が参り、参つたと申し升たから私が勝で……  
「ハア！するとか、参つたと云うた者が負けに決つてるのか小先生そんなことを云わないでも、古へから参つたと、云うたら負けに決つてるのです、だから今の勝負は私が勝つて、田宮が負け升たのです無ハ、アすると小谷お前には代番は今日限りお断り申す小先生勝つたのですから、代番は今迄通り、負たですと代番お断りですよ……無いやくそうでない負たので有つたら代番は今迄通り、勝たのであつたら代番は今日限り……小先生間違られては、困り升なア……勝つたの……無いやくそうでない、今の勝負は勝たのだと思つて行かぬ、あれは

お前の負けだ、拙者が歸つて参つて、第八合目の時、お前は一本突きを入れられた、それがお前は分らん……小あいた……痛い無今頃痛いと云うても何にもならぬ、先づく今日はお歸り……少しく拙者は考へるに……と夫れから源太左衛門は小谷を返して置て、跡で只一人一と間の内に有つて、考へ升た……中々奴は大した腕前だ、又腕前のみならぬ手跡も見事である云う、文武両道の達人、夫れ位ひの者が、僅か四石二人扶持位ひの、足輕に住むと云うのが怪しい、是は必お當家の家風として例年八月十五日に國分八幡の境内で、御前試合が有る、其時には足輕でも、腕に覺への有る時は此の指南番と試合が出来、夫れを見込に足輕奉公に住みし者ならん、何うも今の太刀先を見れば、正しく田宮流である、肥前の國唐津田宮村と云う處に、小田宮流の名人にて田宮殿主と云う小田宮流の



名人が、有ると云う事を聞く、彼は田宮と云う姓を名乗るからには、田宮の倅か、何れも極意者傳の腕前……必き我五百石の道場へ疵を付けに参つた奴に違ひない、彼れ位以腕前が出來れば、此の八月十五日は、残念乍ら拙者は負るで有ろう、依て……捨て置ては相成らじ、今の間に何とかせんければ、ならぬと、堀近常は始めて爰に、源八郎を殺すと云う、いよく是より國分八幡の試合と云う、金比羅利生記のがん目のお話し、一寸よくして申上り……

○ 第 六 席

借て源太左衛門は、どうかして、今の間だに源八郎を殺したいと折を待て居り升たが……モ一そうコ一する内に早八月の十四日となり升た、いよく明日が御前試合と云う事に或り升た、

すると田宮は未だ足輕の事でござい升から、明日の御場所の御掃除御拵へに國分八幡へ行ねばならぬ、處が少しく氣分が悪かつた者ですから、起るのが後れ升た、だから早く行かなさやならぬと云うので、直に手水を使うて、朝飯を済し、是から支度をして行こうと云う、女房のお辻は此おなたモ一是から御出遊ばし升か、且左様是から行く……此おの昨晚私は少し夢を見升たので、其夢が氣にかゝり升から、どうぞ今日は病氣届けでも出して御休を願いどう存じ升、且なにつ夢を見たから、氣に掛るに依て休めと云う、なに、夢は五臓の煩ひである、當てになる者でない、夫れ位ひの事に休むと云う譯には相成らん、此おの月が生み月で御座り升から、何時出來升るかも分り升せん、且な、子が出來るからと云つて、男がいても何んにもなる者でない、そんなら隣の田中の御新造を頼



んで置てやる……」と何と云うても源八郎は中々聞き升せん、それ  
れで隣りの田中の御新造を頼んで置て出掛升た、二た足三足歩き  
升たら、ふつりと切れた草履の鼻緒、はておんぎの悪いと思ひ  
升たが、何是は草履がわるかつたので有ろうと、又新らしいの  
と脱き替へて出升た……のが是が夫婦今生の別れと云う事は、  
後に思ひ知られ升た、借て源八は後れて居り升から、急ぎ足で  
漸々、國分八幡の境内へ参り升た、するとモ一何分に暑い時分  
ですから、朝早く足輕出張してちやんど、片付升た……處へ源  
八郎は参る、見るとモ一皆掃除萬端皆出来て居り升から、馬賊に  
一同の方々源八郎非常に延引仕り升て、甚だ相済みません、平  
に御用拾に預りどう存じ升……」と断を申升た、すると、日頃か、  
ら、可愛がられてる人ですから、こう云う時には徳です……今  
なに、小頭、日頃から皆御厄介計り成つて居り升から、こう

云う時に、御恩返しをしなさい、する時がござり升せん、サア  
小頭へ向うに御神酒と、御赤飯が別に殘して御座り升、サアお  
上りなさい……」と誠に親切に申し升から……田賊にどうも有難  
う存じ升……」と云ひ乍ら源八郎は、呼れて居り升た、すると今  
日は雲宮と云う明日が祭ですから、どうも大變に、賑か……  
此宮様の近邊は群集して居り升、尤も田舎の祭りの事ですから  
角力だとか、素人芝居だとか、浮連ぶしたとか、講釋だとかい  
有つて、大した者です……處が今其群集して居るのが、サア、  
、と天地もくつがへるかど怪しむ計りの、聲が致し升たから  
足輕は何だろと、立上つて見ると、白布を裂くが如く大勢の人  
は左右に分れ升た……すると向うの方より……ハイヨ……と馬  
聲のこね高く、眞一文字眞しくらに、掛けて参り升た、すると  
大勢の者は、口々に「危ないぞ……」怪我なしては相成らん、



討 仇 の 宮 田 (四六)

御指南番のお馬がそれた、危ないぞ……とやい／＼云うて居り  
升た、するのを源八郎は是を聞て、延び上つて見ると、今指南  
番堀源太左衛門近常は、殿様御秘藏の、千里栗毛と云う馬に、  
打跨がりて、土砂を蹴立て参り升た、だから他の足輕は小頭々  
お怪我遊ばしては相成りませぬ、サア此方へ御出なさいと止る  
のですすけれども、「只の目で何石山の秋の月」と云う見る人が見た  
ら直に分かる、源太左衛門の馬は、それているのでない、態と  
そらしているのです、だから源八は同一の方々取騒いでは相  
成らん、お鎮りなさいと申し升た、是れがはんまにうれている  
のですと、成程危ないけれども、そらしているので、此八幡宮の  
境内へ入ろうと云う、入口には、下馬と書た札が立てある、  
假令殿様たりとも、此下馬札の處で下馬遊ばすに決つてる、け  
れどもそれているんだつたら、下馬しやうと思つても、下馬出

討 仇 の 宮 田

(五六)

来ない……堀様のはそれていないんですから、這入る氣遣いな  
い、だから源八郎は安心してるのです……すると今堀は八幡宮  
の入口迄来ると、向うに足輕の田宮源八郎が、たつた一人居り  
ます者ですから、サアしめた、馬足に掛けて蹴殺してやろうと  
境内へ乗り入つて参り升た、田宮は是はしたりと思つたに  
やつ、と言ひ乍ら馬足に掛けようとした、一同の足輕はア、や  
られたと思つてる間に、ばつと体を引外して置いて直に馬の轡  
面を捕へ升た、すると……何處に其こさうのある者ですか、忽  
ち馬は足を揃へて立止り升た、したら源太左衛門無禮者奴つ  
足輕の分際にて指南番の馬を止ると云う法やあらん、無禮を成  
しては相成らん、放しをらんか……とどなり升たから追が源八  
も、此は存外なる其か言葉、不禮者とは、何が不禮でござり升  
る、御指南番には、此の境内の入口に、下馬札が立つてござり



升、それが御分りがない事はござり升まい、假令御前が御出遊  
ばしても、下馬札の處にて下馬遊ばすに決つてる、然るに今か  
馬が外れ升たに依つて、是へ御乗込みに相成たる者と存じ、故に  
御止め申上ましたる次第、一應の御禮を仰せ有つて然るべきに  
無禮者とは何が無禮にござり升るや、無禮者の因然、相分る迄  
は一寸だにも、放す事は相成りませぬ、無禮者の因然、指南番に向つて  
足輕の分際にて言葉返すとは何事である、いよ／＼放さぬと  
有らば、コゝしてやるワと言ひ乍ら手に持て居り升たる、鞭を  
取つて、やつ、と言ふなり、源八郎の手をひと鞭討た、堪らん  
から源八は、手を放すと諸共に、横手に廻るなり、堀が充分に  
踏みしばつて居り升鎧を、ばんと返した……鎧返しと云う奴を  
喰ひ升たから、源太左衛門堪らん、あつ、と云うなり頭天倒と  
其逆さまに落升た、起上るなり無ヤア奇怪なる振舞をなす、サ

ア斯く相成るからには、是非に及ばん、一刀の元に切殺しくれ  
んと言ふなり、井上近江之守新海の鍛い升たる大劔を抜くなり  
切り付け升た、源八郎も仕方がないから、心得たりと全しく一  
刀すらりと、引抜き升たは双方必死の働さ、右へ參らば左りに  
替わす、左りに來れば右に外す、上段下段、一上一下きよく  
實々、千變萬化、火花を散して戦ひ升た、一方は四國にて鬼神  
と云われ升たる、無敵流の名人一方は小田宮流の古今の使ひ手  
名人と名人が真劔勝負、其働さと云う者は飛鳥の如く、目に遮  
ざる斗りなりと云う、實に物凄いでござり升、する間だに堀  
は大隅一聲、やつ、と切り付け升た奴は、源八郎引外して置て、  
切り付け升た、源太左衛門心得たりと受けつたつもりでござり升た  
が、受け損じたる者と見へて、少しく眉間を切り付けられ升た  
あつと云うなり近常は、二た足三足後に下り升た、すると切ら



れ升たのが外と違ひ升から叶わん、眉間だから流れる血が目  
道入る、すると眼が暗むから……試合が出来ぬ、夫れを源八郎  
が、も一つ切り附ると、よいのですけれども、今切ると卑怯に  
なるからとて、思やア今一刀の元に切るは易き事なれども、眼が  
暗んで試合が仕憎からん、依つて傷の養生なして参れ、する時に  
は再び試合を致して得させん……源太左衛門は、をよ、と云う  
なり、此儘養生しに歸ると云う辭には行ぬから……直に手洗場  
に参つて、水で傷口を能く洗ひ升た……うれから懐より紙を出  
して當てがい、手拭を以て後ろ鉢巻を、充分に成し羽織を脱ぎ  
捨て、刀の下緒を執つて擽になし、袴の股立を高く取り、ひし  
やくを取つて、ぐうつと水を一杯呑み返し、刀にしぶりを入れ升  
て、再び此方へ参り升た、最前の時は毎つて居り升たが、今度  
はモ一、一生懸命との道、家が潰れるのですから、全ヒ事なら叶

わぬ迄も切り死してくれんと、云う覺悟で参り升た……すると  
此様子を見た源八は、初手の腕前にこりもせで、またまた、出  
て参つたな、命知らせの夏虫奴、然らば今度は命を貰つてやろ  
うと、最初の時は一生懸命だったが、今度は充分にあなとつて  
居り升、ちよと源太左衛門と反對です……此の上下は大變な違  
いですな……さあこいと云うので、再び打合ました、すると、  
最初の時とは近常大分に大刀先きが烈しい、今一つ、やつ……  
と云うなり切り付け升た奴は、源八郎は受け老して、後ろに下  
り升た、下つたとたんに、悲しい事には八幡宮の境内ですから  
大木が澤山に植てある、其の松の木根が地の上には出して  
升た、それで源八郎は足のかゝどを討たから、答へた……どう  
と尻餅をついた、あつ、しまつたと云ふなり、起上ろうとする  
なり、すかさ老近常は切付升た……源太左衛門とても腕に覺ぬ



が有る奴ですから、叶ひ升せん……どうく肩先から腰車の所迄で、切り下げられ升た、源八郎は「旦那法だ……」と云うなり二の太刀は、横に拂われ升たから……夫れでモ、源八は事切れ升た、堀はしめたと云うので、充分に止めを差して歸り升た、したら大勢の足輕は是を見升て「さあ……大變な事が出来た……」とうく小頭は殺された……小頭のう……小頭のう……「……とうく小頭は殺されたか、分りませんけれども、モ、充分に殺されているのですから、とても助かりません、一同はどうしたらよかろうと、言うている處へ足輕頭の土屋甚五左衛門が馳け付て参り升た土どうしたく田宮が殺されたそうなの……」口へいお頭さんでもない事が出来升た……土可愛そうな事をしたと今甚五左衛門は死體を見ると、とても助からん、仕方がないから……お届け申さんければならぬと、早速お届けをし

て、死體を以て歸る……土是れ井上近藤……戸板を以て庭を以て、サア早く連れ歸らんければならぬから……そこで拙者が先きに這入つて、呼ぶ迄門に待っていて貰いたい……と云ひ乍ら足輕長家の田宮源八郎の宅へ参り升た土お辻は居るか此はいどなた様でござり升……サ、是はお頭ではございませぬか、あのモ、お歸り遊ばしたのでござり升か土只今歸つた……そこで辻、一寸其方に尋たい事がある……其方は侍士の女房だの此マアお頭様の改つたるお言葉、何でござり升土侍士の女房と云う者はどんな事が有つても驚く者ぢやないの……此何でござり升、妙な事を仰しやい升……して今お歸りでござり升れば、良夫源八も、モ、歸り升るでござり升か……土サ、源八も全道して立歸つた此そんなら何れへか、参り升てござり升か土只今表に待てる……此何をして居り升るので土左ればである、今日は源八郎



八幡にて、大變な喧嘩した。主エ、主それで意外な怪我を致した。主あのどんな怪我を致した。早う仰つて頂きどう存じ升……主そんなれば井上近藤、源八を是へ……と云ひ升て足輕仲間、涙片手に南無阿彌陀佛と念佛唱へ乍ら、源八の死骸を内へ入れ升た、お辻は見るより狂氣の如く、薙取る手も遅しと、見ればこれは如何に、モ一充分に殺されているのですから主、あ、あ、是はしたりお頭、處はどこで其喧嘩の相手は何者でござり升る。是はモ一怪我處ではござり升せん、充分に事切れて居り升る……主左れば場所は國分八幡の境内にて、喧嘩の相手かゝるい、相手は御指南番の堀である……と云うている間だに、お辻はウー……と氣絶し升た……サア大變だ……主うれ見ろ是だに依て云わんぢやない、あれ程言うて置てあるぢやないか……しつかりしろ、これくお辻、お辻やいのを……お辻……と叫ぶ。

生け升たが……どうしても氣が付き升せん、いろく介抱し升たら漸々の事で、ウーンと氣が付た様なあんばい……主お辻しつかりしろ、是だから言てるぢやないか、サアしつかりしろ……心を確かに……主ア、あいたゝあいたゝ主どうしたとこがいたい主お腹が痛うござり升主どう痛い……主どうやら生れ升る様で……主エ、子が出来る、サア是は大變だモ一コ一なると男の手ぢやとても行かぬ、サア婆さんと呼んでこなきやならぬ……これ井上近藤、お前達は何をしてる、早く早く、婆さんの處へ行って源八郎が殺され升たからと云うて、うれから源八郎寺へ行って、和尚に子が出来升たから、お早く御出を願ひ升と、早く呼んでこなきや行ぬ△お頭そりや間違てる……主何が間違てるあわてるナ△お頭があわていらしやい升……主マア何でもよいから早く行ってこい……是れ井上貴様は何をさよろしくしてる



のぢや、早く湯を沸かさんか……」と土屋は一生懸命お辻の体を介抱し乍ら、いろく差圖をして……土どうぢやな井上、モ湯は沸いたか……なに未だ沸かん、何をしているのぢや、早く沸かさんと間に合んぢやないか……井へいお頭爰の薪は生薪だと見へて、一寸も燃へませぬので……土なに未だ燃へん井へい、ふうく水けひりと、水計り出やアがつて、燃へないので……土うんな事有る者か、どんな奴ぢやな……」と仕方がないから土屋は下へ下りて参り、見ると、井上は間違へて、流し元に有つた牛蒡をくべていやがる土是れ井上是れ牛蒡ぢやないか……井ア、こりや間違だ……土おはだなア……いくら何だて牛蒡が燃へるかい……」と大變な騒ぎです……する間だに産婆が来るすると暫くの間だに……をきやいと出来升たるのが男の子……婆お悦びなさい升、男のお子でござります土なに男の子……

……お辻出かしたく男の子を生んだと誠に土屋は悦びましたすると林山和尚が出て見へ升た……林誠に土屋氏いやはや何とも申様がござらぬ……實にぬらい事が出来升たなア……土實に和尚存外なる事が出来致した……」と云うると井上が井エーお頭……湯が沸き升た、湯鍬が先さですか、産湯が先さですか……土おは湯桶から先きにする奴が有る物か、産湯から先きに決つてる……」と漸々源八を棺に納めいよく其晩は夜とぎをしまして、翌朝早々源養寺へ葬り升た、林山和尚はいとねんごろに吊ひ升た……すると爰に堀源太左衛門は、足輕たりとも當家の家來を殺したのですから、其儘に捨て置けません、だから上へ届を出し升た……

御届書  
一 拙者義、昨日國分入橋に参詣の際、足輕田宮源八郎



なる者、無禮なしたるを以て、無禮討に致し依りて此段御届けに及び候也

寛永二年

堀源太左衛門近常

八月十五日

大目附 松田大藏殿

と云う書付を出し升たら、無禮討にしたと云うのですから、う  
れで源八郎は殺され損……細は切り徳と云う事になり升た……  
實に永い者には巻かれ太い者には吞まれるとはよく言つてござ  
り升、誠に源八郎はかわいそうな者で……しかのみならず、大  
目付より、足輕田宮源八郎は御指南番に、無禮なしたるを以て  
足輕の役をお取り上げに相成り、妻子は即時遠放を申付る……  
と云う事になる、昨日漸々出来た、乳呑子を抱へてお辻は忽ち  
長家を出る、里方に歸ろうとしても今ちや、家が潰れているに依

て何れへ便る處もなく途方に暮れて居り升……するのを林山和  
尙は誠に是を氣の毒に思ひ幸ひ寺の門前に一軒空家が有り升か  
ら、是へお辻を引取り、いろく世話を致し升た、倍て此の  
出来升た赤ん坊が、坊太郎と申し親の仇討を致し升ると云う、  
いよく是より、坊太郎生立の講談……

○第七席

借てお辻は林山和尙の世話にて、幸ひ花賣又は洗濯物賃仕事等  
を致し升て、只坊太郎の成長するのを樂しみに其日くも送り  
兼ねて居り升た……する間に段々と坊太郎は大きくなる、實に  
光陰は矢の如しと云う實に月日の起つのは早い者……とやこ  
うして居り升る間だに、早四年五年と年月を送る事になり升た  
けれども悲しい事には、坊太郎を手習の稽古たやる事さへ出来



ませぬ、すると坊太郎は毎日近所へ遊びに参り升ては、子供が  
手本を見て、手習してゐるのを見てくる、うれで内へ歸つて來  
て一心に稽古する、するとぬらい者で、お師匠さんに教へて貰  
つていや、稽古するのと違つて、何でも思つてやるのです  
から、却つて味く書ける様になる、教へて貰ひをして、大變に  
能く書く様になり升た……すると誰が云うとなく、此事が評判  
になる、何でも一寸書かして見ると中々よう書く、する者です  
から、村人は感心して、彼の坊太郎は一通りの子でない、家  
に依ると弘法大師様の生れ替りかも知らん、うれにしては身体  
が小さい、それでは豆大師様だろうと、誰が言うとなく、いつ  
しか、此坊太郎を豆大師様と評判する様になり升た……すると  
時は寛永の八年坊太郎が年七才の時でした、林山和尚の云われ  
升のには、男の子と云う者は中々女親の手では、育て慣い者で

あるに依つて、なまじい者にするよりは、一層出家にでもさした  
ら、どうであるか、いわれ升たから、お辻も成程と思ひ升た……  
……一子出家をさすれば九族天に歸る……と云う事がある、と  
うぞそれでは宜敷御願ひ申升と、いよ、坊太郎を出家になし  
林山和尚の弟子になつて、名を空源と改め升た……然るに其年  
の八月十四日の事でした、坊太郎は始めて親は殺されたと云  
とを知り升たのは、今日は源八郎の七回忌生月命日で有ると云  
うので……城代家老の生駒將監様と、土屋甚五左衛門の二人は  
源養寺へ來て源八郎のお墓へ、お参詣になり升た……すると今  
お辻は御授袂に参り升た……辻誠に今日は有難う存じ升、良夫  
源八も定めて悦んで居り升るでござり升ら……生一辻考へて  
見れば月日の立つのは、早い者ぢやのう、七年以前の今月今日  
源八郎は堀源太左衛門の爲に、単法の又掛つて倒れた……今



源八郎がいたれば、立派なる侍士になつてゐるであらう……う  
れに引替へて堀は今御城内では時めく勢い……定めて、其方も  
残念に心得て居るで有ろう……モ一あきらめて居り升るでござり  
升……生併し一子出生致したとやら、夫れは如何なした並有難  
う存じ升……和尚様の御厄介に成り升て、空源と名を改め、只  
今は當寺に居り升るでござり升る……生然れば和尚の弟子にな  
したか、夫れはよい事をした、なまじい者にするよりは出家に  
さしたれば、實に結構な者である……併し辻其方に申し聞して  
置く事がある、若し源八郎は堀の爲めに殺されたなぞと云う事  
を伴に申すと、夫れが爲仇討しよと思ふ様な事が有つては、相  
成らん、故に源八郎は病氣で死んだとでも、申して置き升る様  
に……辻誠にお心添有難う存じ升……それは土屋の旦那様より  
承つて居り升れば、病氣で死んだと云うとにしてござり升……

と云うてるのを、空源は今父の墓に参詣をし升て、母に珠紋を  
返らうと云うので、持て参り升た……が母が知れん、すると今  
一と間の内で聲が聞へて居り升から、何心なく立聞をする、  
我親は今の今迄病氣で死んだと思つて居り升たに、堀源太左衛  
門に殺されたと云う、事を初めて聞き升た……そう云う事なら  
坊主になつてゐる處ではない、坊主になつて幾萬の經を父に手  
向たかとも、お悦びに成るべき法やあらん……夫よりは堀と云  
う敵の首を討取つて、是を父上の墓前に手向たら、いくらお悦  
びになるか分らん……よし、それでは、どうでも仇討をして  
やろうと、初めて坊主は仇討すると云う決心になり升た……  
すると坊主は、りこうな小僧ですか……悟られぬ様に、怨  
と跡へ下り升て……ばた／＼と足音をさして、がらつと唐紙  
を押し開けるなり……おつかさん、そをを返し申升……是



はしたり空源さんうなたどした事が行儀の悪い……あれにお出でになるのは、御城代の旦那様、土屋の旦那様、今日はお父上の御墓へ御参詣下さり升た……サア、是へ来て御挨拶をしや……空ハイ有難う存じ升……」と夫れへ紅葉の様な両手を支へて、挨拶をなし升た……空ハイ其方が空源であるか……可愛い者ぢやのう……當年何才になつた……空ハイ七つになり升てござり升……生チ一七才になつたか……出家になつたからは經文の勉強なして、お師匠様や母にわやくを云うてはならぬぞ……何か買てやる筈であるが……辻……是にて何か買てやりくれ升る様……辻誠に有難う存じ升……主イヤなに最早お供を致すでござい升せう……」と云うので、御兩所は御立歸りになり升た、お辻は門前迄で御送り申升……うれで門前の宅へ歸り升た……それからモ一暫くして日が暮れ升たからお辻は表をしめて、佛

檀にお光りを付てお念佛を唱へて居り升た……すると表をどんくどんく……とたたく者があつた……おつかさん一寸どふぞ……お開け下さい……辻チ一空源さんかい今開けて上るから……」と表を開け升た……辻わのう……お佛檀へ参りに来てくれましたのかへ空ハイお師匠様が参つてこいと仰しやい升た……」と云ひ乍ら……お佛檀へ参り空南無阿彌陀佛々々」と念佛を唱へて居り升た……するとりこ様な様でも小僧の事ですから、こつくりこつくりいねひりを始めました……だからお辻は是を見升て辻チ「空源さん、ねむたいのであろうさあ、モ一お念佛はよろしい故……お歸りなさい……」空おつかさん……今ばんは止めて貰い升……辻是はしたり空源さん泊る事はなりません、男女七才にして席を全じうせせと云う事があるに依つて……お歸りなさい……空けれどもお師匠さんが今ばんは泊つてこいと仰しやい升



た……此ノ一師匠様が泊つてこいと仰しやつたのなれば、よ  
ろしいお泊りなさい……うれではお床を取て上げましたよ……」と  
是から床を取つてお辻と空源の親子は寝る事になり升た……す  
るとお辻は晝間のくたぶれが有る者ですから、「横になるなり……  
……グーッと寝込ました、白河夜舟の高鳴、夜は次第々に更け  
渡る、サツと吹来る夜嵐に……ソツト……しましたから、お  
辻はふと目を覺まし升ると、寝る時には行燈の火を細くして置  
き升たが……消しはしません、うれに、燈りは消へて眞の暗……  
……風でも引ては相成らんと坊太郎の方へ、手を差延して見る  
と、いません、何處へ行つたので有ろう……と浦口をふと見ると  
寝る時には是も締めて置き升たのに、細目に開いて居り升……  
備ては手水にでも行つたのか知らんと、寢巻の儘浦口へ來て見る  
と、時はいつ寛永の八年八月十四日の夜、一と點の村雲もなく、

空は一面の銀盤を磨いたる如く、明光々と牙へ渡り、然乍ら晝  
の如く、其月明りを以て、向うをきつと見てあれば、井戸端で  
カリ／＼カリ／＼ツツと頭から水を浴びて、一人の小僧一生  
懸命に何か神祈りをしてる、あゝと思つて掛け付け見れば……  
是れ余人にあらせ、坊太郎……今母の参り升たも氣付がせして  
……空南無象頭山金比羅大權現、何卒親の仇を討たさせ給へ、  
南無金比羅大權現と一心不乱に祈つて居り升……お辻は聞て驚  
き升た……お辻ははしたり、そなたは空源さんぢやないか、おな  
たは出家の身の上で、神祈りをするとは何事……何故左様な事  
をしていやるお辻おつかさん、モ一私には出家はいやでござり升……  
……親の敵が討とうござり升……お辻エーうんならおなはど  
してそれを知つていやる……お辻ハイ今日御城代の旦那様と、話  
しをして御出遊ばすのを皆聞て居り升た……お辻エーとは言ひ升



たが、借てモ一それが知れてしまふと仕方がない……左様なれば仇討をするがよいと、てお辻も假令どうでも侍士の娘親の仇良夫の仇が討たしたいと、思つていたのですけれども、二人に止められて居升から、よんをころなく今迄云ひに居り升たが……いよ／＼知れ／＼仕方がないから、討たす事になり升た、夫れでは私しも共々に金比羅様をお願ひ申そうとお辻も水を浴び、一生懸命祈り升て……漸々内へ遣入り、翌朝は坊太郎に離にも此事を云うてはならぬと、言ひ付けて、寺へ歸らし升た……然る處が坊太郎はどうぞして、一日も早く仇が討たい……けれども、未だ敵の首取るにも顔も分らんのですから……一變顔が見たいと思つて、居り升た……すると早や、其年も暮れ升て翌れば寛永の九年と相成り升た……坊太郎年八歳の春、正月の十五日の事……生駒家の御先祖の御法事で、太守始め一同家

中の人々御供をなして、御菩提所源養寺へ参詣する、と云うとを坊太郎は聞き升た……する時には必お堀もお供して来るであろう……此時に顔を見て、都合よく行けば、一番仇討をしてやろうと、指折數へて、當日を待つて居り升た……するとモ一いよくあしたと云う、今日になり升た……土屋甚五左衛門は寺和尚は御在でか……尋ねて見へ升た……林是は／＼土屋氏御出遊ばし……定めて御役目とは申乍ら昨今は御急しうござり升う……土いや和尚も定めて御急しい事でござろう……時に和尚に御相談が有つて参り升た……空源の事で……明日は殿様の御供をして堀が出て参る……源八郎は病氣で死んだ、と云うてはあふけれど、何分にくらうな奴で、ござるから若しそれを知つて御前でも憚らぬ、無禮な事をする様な事が有つてはならぬ故……明日一日丈けは彼れを、何れへか出して置て貰いたい、夫



田宮の仇討 (八)

れ丈けで態々参り升た……林是はとうも土屋氏如何にも御貴殿  
の云われる通り、若しもの事が有つては成ら……それでは明  
日は何れへかやり升でござり升しよ……土それでは、そう云う  
事にしてもらいたい」と土屋は明日を約して立歸り升た、借て林  
山は考へ升た……何處へ使にやつた者だ知らん……そんなに遠  
い處へは、とても行か……と云うて近い處では直に歸つて來  
るであろしと、いろくど考へ升た……する内にあしたの朝と  
なり升た……坊太郎はいよくモ一今日であるど、殿様の御乗  
込になるのを待て居り升た……すると林空源や々空ハイお師匠  
様空源は爰に居り升……何か御用でござり升か……林「ナ一空源  
あの其の押入に菓子皿が入れてあるから、一寸出して下さらぬ  
か空お師匠さん此の押入ですか……ア、お師匠さん、中は眞暗  
がりで……分り升せんとこに皿が這入つてござり升……林それ



欠

MISSING



(三一) 田宮の仇討

する……夫れで仲直りが出来たが……一時は一才混雑したので  
す……するのを最前から坊太郎はうつと舟の中を見ると、誰も  
いない……さあしめたと思ひ升たから……そつと舟の中へ飛ん  
で這入るなり、板子一枚まくり上げて、舟底へ這入り升た……  
身体が小さいから、こう云ふ時には便利です……元の通り板子  
をちやんと直して置いて、舟底で一坐懸命……南無象頭山金比羅  
大機現、どうぞ首尾よう江戸表へ行ける様一心不乱になつて  
祈つて居る升る……借て此方ではも一喧嘩が仕舞たから、皆荷  
物は舟へ運んだ……夫れをまた元船の方へ移すのです……する  
と元船の船頭が是を手傳つて、荷物を積込み、暫く休みて居り  
升た……する間だにも一程なく夜が明るであらうと云う時にな  
り升た……最前从小舟の舟底に這入つて升た坊太郎はそつと  
板子を上り、首を出して様子を見ると船頭は皆元船の方へ行つて



一人もいない今の間だに乗り込でやろうと、夫れの出で参り升  
今、綱を繋いであるから、其綱に登り升て元船の處に上つて向  
うを見ると、今運んだ荷物は嗣の間に積である、して船頭は向  
うの方にいるから、幸ひに今荷物の間だの處にもぐり込でしも  
た、うれで様子を考へていると……やがて夜ははのぼのと明渡  
る……東天紅告渡る時分に土屋甚五左衛門は組下足輕五六人を  
連れ升て、大勢の人に送られ乍ら今丸龜の旗を参り升た……△  
左様なれば御機嫌よろしく……お早く御歸りを待ち升る土どろ  
ぞ留守中には宜敷御願ひ申す……と分れを告げて、今舟頭が廻  
し升た小舟に乗つて、元船を参り升た、すると大勢の船頭は  
へい旦那様お早う存じ升△へい旦那様お早うござり升……〇へ  
い旦那様……と皆々挨拶をする土ナニ誠は皆御苦勞である」と一  
々會釋をし乍ら舟に上つて参り升た……それでモ一充分に東が

事に通る越し升て、日を重ねて首尾能く品川を若く事になり升  
た……だから一同は誠に悦び升た……サア是から上陸をして一  
處に江戸表の道入つて参り升る……坊太郎は江戸に來たらモ一  
伯父に分れんと柳生を行くのに都合が悪い……何處かで分れて  
やろうと伯父の油断を、待て考へて居り升た、すると中々今の  
品川とは遠い升て、其頃の品川と云わば大した者です……中々  
今はモ一汽車で新橋迄で一直線に行つてしまひ升から、當町は中  
々賑わいませぬ……其頃の品川は實に大變な者です……私し  
の若い時には……能く覺へて升すへ……儲て餘り賑やかで  
すから、坊太郎は感心して様なあんばい望伯父さん……是は  
何と云う處でござり升る……土是は品川ぢや望品川と申し升か  
……ぬらい賑かな處ですなあ……土ナニ未だ賑かな處が有  
る……未だ是から少し向うへ行くと、高輪と云う處がある……



田宮の仇討 (四一)

一人もいない今の間だに乗り込でやろうと、夫れは出て参り升  
今、網で繋いであるから、其網に登り升て元船の處へ上つて向  
うを見ると、今運んだ荷物は網の間に積である、して船頭は向  
うの方にいるから、幸ひに今荷物の間だの處へもぐり込でしも  
た、うれで様子を考えていると……やがて夜はほのぼのと明渡  
る……東天紅告渡る時分に土屋越五左衛門は組下足輕五六人を  
連れ升て、大勢の人に送られ乍ら今丸龜の嶺へ参り升た……△  
左様なれば御機嫌よろしく……お早く御歸りを待ち升る土どろ  
ど留守中には宜敷御願ひ申す……」と分れを告げて、今舟頭が廻  
し升た小舟に乗つて、元船へ参り升た、すると大勢の船頭は皆  
へい旦那様お早う存じ升△へい旦那様お早うござり升……○「へ  
い旦那様……」と皆々挨拶をする土チ一誠に皆御苦勞である」と一  
々會釋をし乍ら舟に上つて参り升た……それでモ一充分に東が



欠

MISSING



(九一) 田宮の仇討

事に通り越し升て、日を重ねて首尾能く品川は若く事になり升  
た……だから一同は誠悦び升た……サア是から上陸をして一  
處に江戸表の道入つて参り升る……坊太郎は江戸に來たらモ一  
伯父に分れんと柳生を行くのに都合が悪い……何處かで分れて  
やろうと伯父の油断を、待て考へて居り升た、すると中々今の  
品川とは遠い升て、其頃の品川と云わば大した者です……中々  
今はモ一流車で新橋迄で一直線に行つてしまひ升から、當町は中  
々賑わひませぬ……其頃の品川は實に大變な者です……私し  
の若い時には……能く登りて升すへ……倍て餘り賑やかで  
すから、坊太郎は感心してゐる様なおんばい……伯父さん……是は  
何と云う處でござり升る……是は品川ちや……品川と申し升か  
……ならい賑かな處ですなわ……主ナニ未だ賑かな處が有  
る……未だ是から少し向うを行くと、高輪と云う處がある……



夫れから、また芝と云ふ處に来る……金杉橋から向うに、新橋と云う、それから……向うが京橋、日本橋、浅草觀音雷門……向うに行けば、大川で吾妻橋やら新大橋、二ツ並んだ枕橋、下谷山下、廣徳寺、菊屋橋から、門跡前、千住、白鬚、牛の御前、根岸の五行の松から、三めぐり稻荷も見物して、とんとん上るは九段坂、たらく落るはお茶の水、くるく廻るは九の内、傘を一本買たい町……未だ賑やかな處は何らでもある……」と云ひ乍ら、ふとふり返つて見ると、今迄返事をしていた、坊太郎がいない……土オヤ坊太郎は如何致した……坊太郎は……是こりやどうも今迄愛にお出でに成り升たに……如何云う者でございませしよ……どうも乗しなの金比羅様から、をかしうござい升から……虎の門でも行て聞て見升るか……土是だから……もつと年が行なさや厭だと云うたのである……併し御用も

急ぐから探し乍ら……御邸迄行く事にしよ……」と仕方がなかいら、一同は出掛て参り升た……するとお話し變り升て坊太郎は何でも江戸へ行たら伯父に分れんとならぬと考へて居り升た……それ伯父が夢中になつて話しをしてるのを幸ひに、横合から抜けてしまひ升て尋ねく……木挽町の、柳生のお邸の通用門の處迄で出て参り升た、中々一万石位の大名家では有り升るけれど、何しろ將軍家の御指南番と云ふですから、中々立派な者です……今通用門に参り升てお願ひ申升く……何だ……坊ア！柳生はんのお邸は愛でござり升か……△ナニ柳生はん……柳生はんとは何だ……坊アノ將軍家の御指南番で柳生飛彈之守宗冬と云う人のお邸は……愛でござり升か……と申升ので……△コリヤ小僧の分際で柳生はんとは何だ……友達の様に云うな……柳生様の御邸は愛だ、不禮な奴だ……坊アノ殿様は今お出で



になり升るか……△何だい……お出になるわい……おそんなら一寸御目にかゝりたいので……お取次を願ひ升……△なにこりや貴様の様な乞食の様な奴に殿様はお目通り遊ばす者か……馬鹿小僧奴ッお假令乞食でも何でも、はるく遠い處から態々出て来たので、それに逢ねんと困り升る……△何れから参つた……△四國から参つたのぢや△四國、四國と云うたら何處ぢや……△ア、伯父さんお前は、よい年をして四國は何處や知らんのか……△四國位ひは知てるわい……お知てるなら尋るに及ばん……知らん依て尋ねたのや……四國と云うたらなわ、伯父さん伊豫土佐阿波讃岐ぢや……四つの國で四國と云のぢや、分つたか……△それは知てるが、四國の内は、何處の國ぢやと云うのぢや、お四國の内か、四國の内は讃岐で……△讃岐は何と云う處ぢや……お讃岐は九龜ぢや……△在か町か……お三里在、象

頭山ぢや……△象頭山象頭山と云うたら……金比羅様の有る山ぢやないか、して何時出て来た……お夕べの八つ時分に出て来た……△夕べの八つ時分に出て来た……△夕べの八つ時分に出て来た……夕べの八つ時分に……△ア、いしてまた是れ出て来た……お宙を飛んで来たのぢや……△ア、ツ氣味の悪い奴ぢやなわ……そんな者なら尙更入れる事は相成らん……おそんな事云わんと伯父さん取次いでいなわ……頼みます依て……どうぞ……伯父さん、よい伯父さんヤア……またお芋もろたら上る依て……△こらわはい何と云う事をぬかす……イヨく出て行ぬと、此六尺棒でお見舞申してやるぞ……夫れで歸らぬか……おどうぞ伯父さん、そんなこといぬと、頼み升……どうぞ……△堂でも宮でも拜殿でも行ぬ……おではござり升うけれども……△出羽でも奥州でも仙臺でも行ぬ……おそここの處を……お底でもふたでも鍋でも釜でもへついで行



かぬ……… 坊イヨく 取次でくれなんたら……… ばいたれしてやる  
ぞ……… 云うてる處は、今ハイヨと馬にてお歸りになつた方  
がござい升……… が此人は何者……… どう云ふ風に坊太郎は柳生家  
へ入り込み升るか……… 余りお長くなり升から……… 一寸一ふくし  
て直に申上ます………

○ 第 十 席

そこで此の馬にてお歸りになり升た方は、御當家の家老で大道  
寺平馬と云ふ方です……… 小石川の水戸の御館は御使ひにお出で  
遊ばしたのです……… 昨夜飛彈之守の御前は夢を御覽遊ばしたの  
です……… 其夢は飛彈之守様が休んでお出で遊ばし升たら……… 御  
枕元の處で……… 飛彈々と云う聲が聞ゆる……… から飛彈之守は頭  
を上て見ると、枕邊に一人の白髪の老人が白装束で立て居られ

る……… したら其老人の云はれるには飛彈明朝は其方の邸に一人  
の出家が、参るであるに依て、参つたらば、孝道に依て親の仇  
討をばする者であるに依て充分に劍術を教へ取らし升る様に………  
……… 最も此事は水戸家にも申進してある……… と云われ升たから  
飛彈之守様は……… はつと云うて顔をお上げになると、身体汗で  
濡れている、正しく夢なんですから……… 妙な夢を見たと思つて  
お休みになると、又全し夢、又お休みになると、又全し夢………  
一ト晩に全し夢を三べん御覧になる……… うれで邊の飛彈之守  
様も、モ一寝られません……… 夜の明るを待兼ねて、家老の大道  
寺平馬に此事を申され……… 水戸の館にも申し聞けて有ると云ふ  
のですから……… 聞にやられ升たのです……… すると平馬は水戸様  
に参り升た時には未だ早うござり升たからか館は今お目覺めに  
なつて、是からか手洗をお使ひになろうと云ふ處でした……… す



るとお館は後に諸國漫遊成され升る光國卿です、前名鶴千代丸  
機と申し升、中々御名君です……誰が参つた、なんだ柳生の方  
より大道寺が参つたか……苦うない平馬に是れと申せ……ナ  
平馬か、何も申すな……今日参つたのは昨晚の夢の一條である  
う……と仰せられ升たから、平馬はわきれ升た、が其通りです  
から左機でござり升と申し升た……予も夢を見た……本日は其  
出家が参るで有ろうに依つて、参つたらば、テイ重にして劍術  
を充分に教取らし升る様……と飛彈に左機申しくれ、してま  
た、予の方にも通知を致しくれ升る様に……と云われ升た……  
だから平馬は不審に思つて歸つて参り升ると來てる……だから  
いよ／＼わきれ升た……

夢、凶夢、雜夢と云ふ……そこで此正夢と云のが、俗に申し  
升する正夢と申し升……夢は五臟の煩いと云う聖人に夢なし  
馬鹿に苦勞なしと申し升る……が中々此の正夢許りはそう一  
がいには云われ升せん……當てにならんと云うのは、其私し  
共の見る夢で……是は雜夢と申し升……こんなのは何んにも  
ならない……ほんとの五臟の煩ひです、モ一講釋師位ひでは  
つまらん者ですから……何か一足飛びに儲かるほろいことがな  
いか知んとか考へてる、するには何でも金がなくては何する事  
も出来ん、金さねわればどんな女でも抱いて寐られる……と  
うぞして金が欲しいと思つて……フト金を貳萬圓も拾う……  
サアしめた、と云ふので、俄かに天を昇つた心地して、サ  
ア是から借金返済する、家を借りる位ひちや行かぬとて、  
充分い、家を探して買う……嫌がなくは行かぬとて、古今



獨歩珍無類と云う美人を女房にする、それで未だたらないか  
らとて藝者を身受する……常にせんぐり替つた、絹布を着て  
金の指輪ダイヤモンドの這入つた奴を三つもさし……のんこ  
のしやあど、しかけると、オイ、魯生、魯生何ををらわ  
れてるんだい、起きな起きな、友人に起される、起て見ると  
夢だつた……おまけに少しく小便をらびつて蒲團が濡れてる  
てな……災難ですナア……そんな夢は何にもならないのです  
……そりやヨ一後でいくら腹が立つか分らない……随分氣し  
よくの悪い者ですナア……夢の購釋をして恐れ入り升るけれ  
ども、實際有る奴です……  
然るに今飛彈之守様の夢は正夢と申し升る……平馬は門前迄で  
歸つて参り升ると一人の小僧、小僧とは云ひ乍ら……出家は出  
家ですからね……太コリヤ、此方は何れの御出家である……

したら門番は△へい只今是に参り升て何だか、お殿様に御目に  
掛りたぬ故に取次をしろと申し升……貴様の様な乞食坊主には  
お殿様はお逢ひにならぬから、取次する事が出来んと申し升て  
歸れと云うのでござい升けれども、何と云うても歸り升せん、  
へい強情な奴でござり升……太ムームして何れからお出でにな  
つたか、聞たか……△へい昨晚の八つ時分に、讃州の丸龜から  
宙を飛んで来たと申し升……氣味の悪い奴で……と云うのを聞  
かれ升た、大道寺平馬は、ハテ不思議なる事も有ればある者で  
ある……借ては出家と云うのは、此方であるかと思ひ升たから  
……太是はお小僧能くころお出でになり升た……拙者は當家の  
家老、大道寺平馬と申す者何はともあれ御前に其由を申し升れば  
いで御同道遊ばせ、御案内仕り升う「下ていねいにして大道寺此  
の小僧の手を取つて連れて這入り升たから……門番はをどろい



た……何だの同役……口をかしいせ……「是も不審に思つて居り升……すると平馬は早々此坊太郎を御自身の部家へ待して置て、御前へ出て参り升た……すると殿様はお待兼ね……飛平馬どうで有た小石川のお館には、飛彈はたわいもない事を云うて参つたとか笑ひになつたらう……大ナカく以て決して左にあらせ……實は是々でござり升る……飛フームそんならお館にも夢を御覧になつたか……不思議な事も有る者である……それでは今日出家が参るであろうに依て……参つたらていちよにせよ……門番にも不禮のない様に申し付け置き升る様……大恐れ乍らモ一参つて居り升る飛ナニモ一参つて居る……左様なれば早々其出家を是へ召迎升る様……」と仰せられ升たから、直に平馬は坊太郎を連れて、御前へ出ました……飛彈之守様は御覽になると、小さい坊主ですから、驚かれ升た……飛こりや、小

僧表を上げ……其方は何れより何れへ参つた、して當年何才ぢや……申して見よ……坊ハイ四國は讃州九龜から参り升た……御當家様は日本一の劍術の名人と云う事を聞き升た……から夫れ故海山越へて懇々参り升た……どうぞ劍術をお教へを願いどう存じ升、私は七つより出家になり升て、只今は九つになり升、名は田宮源八郎と申し升……者の悴で坊太郎と申す……飛フーム然らば其方は侍士でなく出家の身の上にて何故劍術の稽古を致すのである……坊ハイ其お尋は御最もでござり升……私しの父は寛永二年八月十四日に九龜在國分八幡様の境内で、生駒家の指南番堀源太左衛門近衛と云う、無敵流の名人に殺され升た……夫れ故俱父殿天の父の仇……敵討がしどうござい升故に御願ひ申しに参り升てござり升……どうぞお教へを願ひ升……飛フーム儲てはソ一云う事で有るか、左様なれば充分に修行を



するとモ一此時には頭の髪も充分に延びてい升から、鬚を云うて飛彈之守様お小性役となり升た……夫れで劍術はと申し升と餘程出来る様になり升た……中々小供ですけれども大人でも叶わん位ひでござり升……それで殿様は先づ侍士と云う者は只武藝許りでは行かぬ、一つは度胸と云う者が確かでないで行かぬ……依つて一度坊太郎の度胸を試して見ようとお考へになり升たすると爰に、此間だから柳生様の御邸では御庭普請をしてお出で遊ばし升る……そこで此の柳生のお邸は元と誰が居られ升たと申し升ると阪崎出羽之守と云う人が居られ升た……阪崎の家が潰れてから其跡へ柳生様がお出でになり升た……其以前は此邸は寺でござり升て、それを邸にし升たのですから、どうも庭など云う者は、大變廣うござり升す、だから今度はお庭前へお入の泉水に築山の立派なのをお拵へに相成るので……それで

させ、仇討の出来る様に致しとらする様……」と是から直に水戸のお館へ此事を云うてやり升た……それから坊太郎は、モ一中心不亂に聞てるの事だ……から稽古をしました、晝はひねもす夜は夜もすがら、長の年月を一日も怠りなく勉強しました……夫れで暫くの間は餘程出来る様になり升た……是が妙な者でいくら教へようと思つても、いや、稽古する奴は何にもならない……假令どうでも一生懸命と云う奴は又格別です……親に分れ故郷を出ではるばると、此江戸迄で来たのですから、ろりや中々一と通りではござり升せん……する間だに光陰は矢の如し月日には關守なく、早や五年の星霜を送り升た……併し講釋と云う者は早い者ですなア……いくら氣車も早い電信が早いと申し升ても……講釋には勝てますまい……一と口でモ一五年起てしまひ升た……偕て坊太郎に於きましては十三才と成り升た、



人足が澤山仕事に這入て居り升る……すると其人足が今お晝飯を濟し升て……一寸一ふくして、皆わわく話しをして居り升る……すると茲に源助と申升人足は、私しと一所で貰が嫌ひです、だから一ふくした處が仕様がな……随分へんてつな者ですなア……私しも貰はぬらい嫌ひです……皆わの貰を味ううにお上りですが……私しにして見と分り升せん、どこがあんなに味い知らんと思ひ升……それに酒です……酒も私しは嫌ひ……虫が好かないですなア……酒は嫌い、貰は嫌い、女は嫌い、博奕は嫌い……何が好きだと云うと好きな者は……商賈勉強と親孝行だけです……だから京都府知事から褒美か下るだろう……と思つて待てるのです……未だ下らないのですけれども……子ろれで此源助は貰を呑ん者ですから仕様がなないので、他の者は未だ皆一ふくして居るのですけれども源助一人、仕事をして居

り升た……すると今源助の鉄の先きに、かちりつ、と當り升た者がある……はつと思つて見ると中から壺が出升た……サア源助は、しめたと思ひ升たなア……未だ離れも来ないので幸ひにそつとその壺を掘り出して見ると、余り大きな壺ではない……ふたがしてぐるりには目張りがしてある……源助は考へ升た……こりやおれが……日頃から親を孝行にしている者だから、天が威應ましまして、此の金をおれに授けて下し置かれたのであ……誠に有難いと云うので……暫く間だ壺の前に両手を支へて三拜九拜……して居り升る處へ……一仝の人足はどやくと仕事に參り升た……見ると源助は壺を前に於て、抵頭平身して居り升から……△「イヨ、何だありや……何だかをかしな壺を以てやがるせ……」口「何だいあの壺は、どうしたんだろ……」聞て見……てやろ……をい……源助……「サア源助、有難う存じ升……」口「を



いゝ源助何が有難いんだい……何だいそりや……」と云われて  
 源助は漸々気が付いたんだ……「源こりや何だ……其おれの者だ  
 ……」  
 「おれの者だてそんな者を手前はとうしたんだい……」源お  
 れが日頃から親を孝行にする者だから、天が威應ましまして……  
 ……此の壺を、おれに授けて下し置かれたのだ……」  
 「馬鹿な事を云うない……源助其壺は何處から掘つたのだい……」源こりから  
 て此所からだ  
 「さうなら源助氣の毒乍ら、其壺は手前が一人で  
 もつて取つて置くと云う譯には行かねへ、いくら手前が一人掘  
 たのでも、コゝして皆我々が仕事に一所に来てゐるんだから、  
 やうはり夫れくわけなきや行かねんだ……」  
 源馬鹿な事を云うな、そんな事をしたらおれが日頃から親孝行にしたのが何に  
 もならぬ……」  
 「さうな事はどうでいゝや源どうでよくはないよ  
 ……」  
 「それぢやどうでも其壺は手前が一人で以て取ろうてんだ

な……餘り慾の深い事をぬかすと、源助しまいには其慾の皮を  
 はがれるぞ……源さうな譯の分らない事を言う者ぢやないよ……  
 ……無理な事を云うと困る……源何が無理だ、何が無理だ……  
 生意氣を吐しや張り倒すぞ……さうなると手前には一文にもな  
 らねへぞ……」と大勢の人足は今源助が掘り起した壺を真中に於  
 て、わわくと喧嘩をしてる……處へ御家老の大逆寺平馬は、  
 どう云う工合になつてる知らんと云うので、今御出でになる……  
 ……すると件の廻り人足はわわくと云うて、何だかやかまし  
 く喧嘩をしてる……だから平馬は是を見て至こりや、人足共  
 何をそんなに喧かましく申して居る、今朝も喧嘩を致し居つた  
 ぢやないか……そんなに喧嘩を成しては相成らんだ……源へい  
 ……  
 「恐れ乍ら御家老様にお願ひ申升……私は源助と申升る人足  
 で……今仕事をして居り升たら……日頃から親を孝行にして居



り升るから天が感應ましまして此壺を私しに授けて下し置れ升  
た……それを他の人足が皆取ると申升ので……うんな事をしま  
したら、私しが日頃から親孝行をし升たのが、水の泡と成り升  
ので……どうぞ御家老様の御威光を以て、是非此壺は私しの者  
になり升る様、お取計ひをお願ひ申し升……大ブームを云う  
事が……左様なれば其方は親孝行か……イヤ孝は國の寶萬金の  
司と申す位ひで有る……親孝行とあれば他の人足にも割つてや  
る筈であるけれども……其方一人に取らする、そこで他の人足は  
不便であるに依て、金二分宛つ下し置れる……他の人足は何だ  
い馬鹿々々しいと思ひ升たが……仕様がなの家老の言詞だから怒  
ると云う譯にも行かま……よんどころなく「へい」と申し升た……  
……すると源助は大いばかり……いよ……壺は一人で以て占領し  
升た……すると大道寺は「大こりや」源助其中には金が這入つ

てあると云う事を改めたか……還未だ改め升せん……大一應改  
めて見ろ……選へい長り升た……是から作の壺を改める、サ  
ア諸君此の壺の中は正しく金でござい升るか……又他の者でし  
よか、一寸一息入れ升て申上ます……

○第十一席

借て御家老は改めて見よと云われ升たから……源助は悦び乍ら  
今日張を取つて、ふたを叩開き升たら……どうも源助さやつと  
云つた……一同は何だろと思つて見ると、金處の騒ぎぢやない  
……人間の骨計り一ぱい這入つて……イヨいと皆驚き升た  
……したら御家老はこりや源助金は何金程這入る……還恐れ  
乍ら金處ではござい升せん……大變な者が這入つて居り升る……  
……大何だ還人間骨計りです……大ブーム人間の骨計りであ



る……假令人間の骨にもせよ、汝が日頃より親を孝行にする者であるから、天が感應ましまして、其骨を授けて下し置れたのである、有難く御受けに及べ……」どうも源助情ない事になつたと思つたが仕様がな……源一恐れ乍ら斯様なる者をお貰ひ申し升たる處が、仕方がございませぬ……どうぞお助けを願ひ度存じ升……すると一同人足は大いばりで一同やわく親孝行くどぞめき升たから堪らない源助泣き升た……漸々の事で其壺は浦の廣庭の處へ以て行けと云われて廣庭へ運び升た……大りや、人足共今爰を掘つた土は何れへやつた……一同へ今築山の方へ以て参り升た……大左様なれば皆元の通りには是へ持つて歸つて埋めて置け……一同なせうんな事を致し升るので……大浦き築山へけがれた土を運んでは相成らん……皆元の通りにせよ……」と仰せられ升た大勢の人足はばやき始めた……馬鹿々々

しい……源助めがいらん者を掘る者だから、こんな事になるのだ……こんな馬鹿な事はないと思つたが仕方がない……すると御家老は餘り面白い者ですから、お笑ひ草に御前へ此事をお話致し升た……すると飛彈之守様はお笑ひ遊ばし升た……それから殿様はお考へになり升たので……坊太郎の度胸を試すのは爰だ……と俄かに其晩家中の子供計り集めて百物語語り云うお講釋を始められ升た……すると宵の間だはそんなに子供でも、こわいとは思ひ升せん……が夜が段々更け来るに随つて話しが大分こわくなつて来る……する者ですから段々皆大勢が一つ處へかたまつてしめた、だから御前はモイヤかろとお考へに成り升たから太ヤア、誰か有る今日人足が裏に於て……骸骨の這入つた壺を掘り出したそらで有る、それが裏の廣庭に有る故に誰か一人にて是を手に見せくれる譯には行まいか……」と仰せら



れ升たが中々只さへこわがつて居り升たるに、廣庭迄一人そんな者を取りに行くてな事は出来る者でない……どで誰一人も行こうと云う者がござい升せぬ……飛誰も壺を取りに参る者はあらざるや……」と再三仰せられ升た……すると爰に最前から此お話しを聞て居り升たる坊太郎は誰も行こうと云う者が不在者ですから坊太郎は申上り……只今仰せられ升る……廣庭の壺、不肖なる者には候へ共、此坊太郎に仰せ付下し置れ升らなれば誠に有難き仕合せに存じ奉り升る……飛フーム然らば坊太郎其方に申付る……早く参れッ……坊ハ、ア……」と云ひ乍ら立上つて、手燭に明りを付て……夫れから御庭前へをりて参り、飛石傳いで……お泉水の橋を渡りそれから築山のぐるりを廻り升て大敷の處へ來たして向うが廣庭です……充分に手燭を向うへ突き出して、すかして見ると成程向うの方に見へる様です、だか

ら漸々夫れへ参り升た……やがて其壺を細を以て來て堅く縛つてしまひ……餘り重くない者ですから、片手に夫れを提げて歸つて参る……今大敷の處へ來ると……風もないのに箆が、がさく……と音がする……から坊太郎はふと向うを見ると、夫れへ現われ升たは、顔には目も鼻も口も何にもない、のつべらばう、身体は眞黒けの化者が……四つ這いにはつてよろく……と坊太郎の傍へ出て來る……大ていな者だつたら、きやつと云うのですけれども、中々そんな者に驚く様だつたら、只一人斯かる處へは來ない……別に驚く様ぢや今時分にこんな處へ來る氣遣ひない……知らん顔して行こうとすると、件物の化物はよろく……と坊太郎が今向うへ行くとする傍へ出て來る、仕方がないから左の方へよけ升たら……又左の方へ來る故に、又右の方へよけると又右の方へ來る、右へ來れば右へ左へ來れば



左へへ、どうして通る前に立つて邪魔する者ですから無頼……  
無頼者奴つと云うなり得物がなから手刀を以て一と討……さ  
やつと云うなり曲者は倒れ升た……から其儘跡をも見せして坊  
太郎は元の道を歸つて参り升た……坊恐れ乍ら坊太郎立歸り升  
てござり升る……うれつと云うので殿様始め一同は椽側の處迄  
で出ると、成程一つの壺を以て参り升た……太サ一坊太郎其方  
なればころ大義であつた……ヤア……かある坊太郎にすぎ  
の水を取らせろ……と仰せられ升た……今仲間が水を以て参り  
升るので手を洗わんとするのを、御覽に相成り升たる太は本  
あじや、く待て、坊太郎、其方の手は如何致した……餘程血  
沙が付いてをる様である……と云われて坊太郎も始めて気が付  
いたのである……坊ハ、ッ……恐れ乍ら是は……只今廣庭に参  
り、壺を以て大鐵の處迄参り升たれば……一人の曲者現れ、右

へ参れば右へ左へ参れば左へ、通行の邪魔を致し升る故に……  
止を得……手刀を以て討ち升て……ござり升、お目ざわり  
相成り升て恐れ入り升……太フム左様なれば其壺は椽下に入  
れ置き升る様……と其晩は夫れでおしまいに成り升た……する  
と翌朝に成り升ると早くお目覚で……直に太坊太郎を是へ呼べ  
……と仰せられ升た……坊太郎は早く罷り出で升た……坊御前  
お早う存じ升……太サ一坊太郎其方に尋る事がある……昨晩其  
方が彼の曲者を討たるには……得物は何を以て討たるや、手刀  
と申したるが、手刀を以てと云う風に討たるや……坊恐れ乍  
ら氣合の一と手を以て討ち升てござり升……太フム其氣合の一  
と手と申すのは坊恐れ乍ら坊太郎義御當家へ参り升てより、早  
五ヶ年の星霜を送り候、然るに毎朝御前には御手洗を使われ候  
の後、又水を一ばいにして……やつと云うなり氣合の一と手を



以て其水を……お切り遊ばす……誠に坊太郎は是を見て不思議に思ひ、私しも同じ様に水を切り候處……中々以て切る事が能わす……それを毎日々々やり居り候處……漸々にして五ヶ年目に此春より、切れる様に相成り候、依つて昨晩は得物なきを以て止を得て手刀を以て討取たる次第に御座り升る飛ブーム其の氣合の一と手こそ柳生流の極意なり極意を受けずして、極意を受ると云う、實に感ぜるに猶餘りあり……然らば腕前も上つたであらう……併し今暫く修行を致したならば名人になるだろ……」と仰せられ升た……

そこで一寸私しが申上置き升るが、大敵の處より理われ升たる曲者は、何だぞ申升ると柳生家の仲間、文平と申す奴です……晝間博奕を仲間か打つて居り升て、文平一人負け升た……他の奴は皆な酒を呑みに出る……又女郎買に行く奴もあ

る、けれども文平は錢がない者ですから……番から部家に、くすぶつていやがる……處へ一人歸つて来た奴が有る……△文平何してるのだい文何てつまらねへから寐てるんだ……つまらねへ好きな酒は呑む事は出来……錢はなし……△酒を呑してやろうか……文呑してくれ頼みだから……△呑してやる替りに……  
今日浦の廣庭に掘つた壺が置て有るから……取て来な……取て来たら……やるから……呑してやるから文それを取て来たら呑してくれらなア……△飲してやる文それぢや取てくるから……と浦へ取りに行たので……  
取り行たら、モ一誰か前に行てる、誰だろうと見ると、お小性の坊太郎と云う、小供だから……一番考へた……折角取りに来て呑む事が出来ねへど、癡念だから……驚ろかしてやる



うと……俄かに前に申升た通り思ひ付てやり升たので……中々なんぼ以前が寺だつたからとて、柳生の御邸へ化物が出るてな事は決つしてあり升せん……

すると此事が評判になつて、坊太郎の度胸の有るのを皆人が知り升……すると今水戸の御館から御使ひが参り升た……飛彈之守と坊太郎の兩人早々参る様にと云う御使ひです……何の御用だか分りませんけれども、飛彈之守様は坊太郎を連れて、早速御供備への上小石川の御館へ御出でになり升た、するとお館光國公には御符袋でござり升た、飛彈之守様御出でに成升たと云う取次を致し升たら、早々是へと仰せられ升た……飛恐れ乍ら飛彈御召しに依つて早速推参仕り升てござり升……光サ一賊に飛彈御苦勞で有つた、本日其方を呼び寄たるは、余の殿にあらま坊太郎の事である、彼は餘程腕前は上達したそうであるの

……飛左様大分に出来る様になり升てござる光未だとても仇討は出来ざるや、如何であらう……飛どれ程出来ると申した處にても、未だ源太左衛門とやらを討つ事は到底相成不申と存じ升る、夫れには今両三年修行せまば相成り升まいと心得升る……

光左様なれば是非に及ばせ……今暫く修行をするがよからう……こりや坊太郎一日も早く劍術の勉強をして仇を討たぬければ相成らぬぞ……坊有難う存じ升……光仇討の時は充分に盡力をして取らすぞよ……坊ハ、ア……と云う其内に御膳部が出る、坊太郎も、主人と共に頂き升た……夫れで漸々歸つて参り升た……がサア夫れからまたモ一層勉強致し升た……夫れで坊太郎は十五才に成り升た時は、大した者になり升た、モ一此頃では家老の大道寺平馬と、三本勝負すると、二本迄では平馬に勝つんだ……だから中々の者です、依つてモ一よかるか知らんと



考へ升た、だから水戸の方へ此事を申やり升た……すると水戸様の方では坊太郎全道にて来れと云うの御使ひが見へ升た……故に早速全道して、小石川御館へ出で升た……サア是で御館は光飛脚坊太郎は餘程上達致したのであろうのう、左様大分に出來升る様に相成り升て御座ります、光然らばモ一敵が討てるであらうか、其義計りは未だ相分りませぬ、何となれば敵堀源太左衛門近常なる者は、どれ位ひの者なるや、夫れが相分らざれば何とも確かなる返答なし難く存じ升る……何分にも其堀と申する者は、四國に於て鬼神とか申する者にて、かりそめにも十八万石生駒家の指南番なり、果して出來ざる脚前にあらせと心得升る……光フーム成程尤もである、然らば其堀と申する者はどれ位ひの者であるや、一應試して見たれば如何であるや、試して見たれば討てる、討てざるは相分るのであろう、して討てれば

幸ひ討す事になし、討てざれば是非に及ばぬ今一修行をさす事に致し……充分に討てる様に相成つたれば討する事に致し升る様に……是は御館の御言葉御最も至極に存じ升……然らば左様なる事にお願ひ申すでござりましょう……光然らば予が指南番辻文治郎を使わすであるに依て、其方の家來は何者を使わす……飛左様、飛彈の方に於升ては家老大道寺平馬を使わし升るでござり升る……光成程大道寺なればよからう……併し坊太郎も當年十五才にもなつたる事であるに依て、此儘元服もせきに歸るも不都合で有るに依て、幸ひ本日は吉日で有るに依て元服を致させればよからう……どうぢや予が目通りに於て元服を致せ……と仰られ升た……坊太郎も、モ一十五才にも成つたのですがら、何時迄でも元服せせにはいられ升せん……からいよく元服をしました……光イヤなに飛彈坊太郎に於ては、いよく



元服なしたれば坊大郎と云う名にては如何にも小兒の様であるに依て不都合である……故に予は此間だより考へ居つたのである、小太郎と改めては如何である……して名乗は予の光國の國の一字を取らするである……故に其方も飛騨宗冬であるに依て……其の一字を使したればよからう飛騨宗冬……然らば宗冬の名を使はし國宗と致し升ては如何でござり升らう……光國宗とはよい名乗りである……左様なれば田宮小太郎國宗となす……と云うので坊大郎は誠に結構なる者でござり升る……かりそめにも副將軍と將軍の御指南番の前で元服をさして貰ひ、名乗を頂くと云う、實に悦ばしい事とござり升る……夫れから國元へ久し振りにて歸るのであるからと云うので、新調致され升たる、黒二羽重の着物に同じく羽織、大小も結構なる者を一通り添へて下され升た……しかのみならず、金子二百兩は國元へ立歸つた

れば母への土産に致せと仰せられ升て下され升た……實に如何から何迄結構な者でござり升……立寄らば大木の蔭と申し升て、どうしても交際するのなれば、いゝ人と交際しなきや損ですな……貧人と交際した時には徳は行かぬだから魯生でも考へるのです、どうしても是から、モ一つ交らない奴には交際せん……と決心し升た、夫れで三井や鴻の池住友の諸家と是から交際し升つつもりです……併し向うがしてくれられせん丈けの事ですから、何んでも交際するのには、身分のよい人に交際せんと損です……立寄らば大木の蔭とはよく言つてござり升……全じ交際するのでも、講釋師の様な者と交際したら御容様方災難です……直に無心云われ升……金借りたらもらつたと思つてから、返す事知らないのです……何しろ相手が副將軍と云うのですから……違つた者です……サア是から小太郎國宗は充分に支



度して、水戸家の御指南番一乃流の名人辻文治郎と云う人と、柳生家の家老大道寺平馬と同道の上、讃州九龜へ歸國の上、いよく堀源太左衛門の腕前を試すと云うの一席一寸例に依り升て……

○第十二席

そこでのいよく三人は品川より、舟に乗り升た……それで海は無事ではござい升るから、日を経て、讃州九龜の濱へ着致し升た……早速是から上陸を致し升て城下の新町二町目の大黒屋正平と申す宿屋に泊り升た……うれで堀の道場は何れにあると申し升ると侍小路です……だから翌朝に行く事になり升た……勝負するのではなへ、腕前を試すのである……故に向うの腕前さへ分つたれば、負けてやつたればよいのである、と決して行く事になり升た……うれで翌朝になり升ると餘り早く行た處が仕様

がないから……象頭山へ参詣しよと、是から坊太郎丈け宿に殘して置て、大道寺と辻の二人が出掛て参り升た……それで二人は金比羅へ参り升てから、堀の道場に出て來升た……すると今日は幸ひ積古日と見へ升て道場には盛んにばんばんくと烈しき竹刀の音がして居り升る……だから二人は、ハリアア爰だなど思ひ今門を道入升て玄關に参り升た……すると中々立派な者です……それで始りは辻文次郎が玄お頼み申す、お頼み申す……と聲を掛け升たが返事がない者ですから……大道寺は氣が短かい……から大きな聲を出して大頼モ……とどなり升た……したら漸々取次の一人が積古道具を付升たなりで夫れへ出迎ひ升た……どうレと言ひ乍ら……すると辻文次郎は玄エー拙者は武術修行の者でござり升るが……先生の御高名を承り升てはる推参仕り升たる次第、どうか一本御教授に預りどう存じ升



よろしく御取次をお願ひ申し升……取左様なれば暫く御控へあれ……と奥へ取次ぎ升た……取エー先生に申上り升……近何だ……取エー只今武術修行の者である先生の御高名を聞て参り升たから一本御教授に預りたいと申し升……如何致し升う……近どんな奴だ……取左様でござり升……一人は年頃三十三位ひ小さい侍士で……一人の奴はモ一四十位ひで又大きな身体してる奴で……ござり升る……近ブームそれぢや日長のねむけ覺してゐるに依つて是へ通してやれ、一本宛つなぐつてやろう……取かしてこまり升た……と取次は玄關へ参り升て……取左様なれば御兩所此方へ御通りなさい……と案内を致してやがて奥へ通し升た……すると床の間の正面の處には、主人と見へて大兵肥滿にして先づ年頃は四十前後、色はあく迄も黒く筋骨逞しくして、髪は赤く髯はいろくあるが……此源太左衛門の髯が違う一種

特別のひげです……髯も、節儉髯と云うあり、陣笠下と云うあり、どちよ髯と云うのもあり、李鴻章と云うのもあり升、此の源太左衛門のは鳴戸髯と申し升……鳴戸髯と云うのはどう云う髯だと申し升と、うづがもうてるからです……中々いか機根性の悪るそんな髯です、成程一寸見ると敵らしい顔している……漸々兩人はうれへ両手を支へ升て……ロエー只今御取次迄お願申たる、我々は武藝修行の者でござり升……先生の御高名雷の如く推参仕り升た……何卒よろしく御教授に預りとう存じ升……近是はどうも拙者は堀源太左衛門近常と申し、當生駒家に於て無敵流の指南をなしている者である……見れば未だ若年者であるなれども、武藝の修行せんと云うのは中々よい心掛けである……左様なれば一本教へて取する……して両所は何れの方で姓名は何と云う……と云われ升たから辻は文ハイ……私は常州は



水戸の物で……近然らば水戸家の藩中か……「文一エ」左にあ  
らす水戸の卿侍士でござり升る……して名前は辻半平と申升……  
……「水戸の指南番一刀流の名人辻文次郎てな事は云われ升ん……  
……だから郷侍士辻半平とごまかして置たのです……近ハ一ア  
借ては水戸藩でなく郷侍士か……して今一人は……是も柳生家  
の家老大道寺平馬である、てな事は言われ升せぬから何とかご  
まかさんと云かぬ……此人は今迄ではうそを吐いた事がない人  
ですから、忽ちうろが出ない……中々うろと云う者は出ん者で  
す、今いうて今はな……講釋師うろを扇でたゝき出すと申升け  
れども、夫れが中々たゝき出せん者です、講釋師見て来た様な  
うそを吐く……と申し升るが……中々見て来た様なうろが吐け  
たら一人前ですが中々見て来た様には云われぬ者です……どう  
しても大道寺は辻の様に出ない……「大エ」拙者でござる

か……拙者は……其ノ一を……ぬへん……其のゆゑゆる……エ  
一而うして就中……到底……むしろ……あながち、かるが故に……  
其の……左れば姓名でござるか……「源太左衛門はこいつは何を  
云うてよるのぢやと思つてい升……近姓名でござる……」余り長  
い者ですから、横合から辻が長い……と云ひ升た、したら漸々  
に「大エ」長崎でござる……とびつくりした様に申し升た……近ハ  
「ア」長崎は何れで……大左れば長崎は丸山でござる……近是は  
どうも長崎の丸山して御名前は……大左れば名前は……日本武  
者修行を仕つる……近それは分つてる、御名前は御姓名は何と  
申し升る……「文姓名は其、日本武者之助と申す……近日本武者  
の助……是はまた御勇しい名前でござる……」辻はあきれ升た……  
日本武者之助でなみす……うそ知れてる……すると源太左衛門は  
少しく不審に思ひ升た近辻半平殿は水戸、して日本氏は長崎……



水戸と長崎は餘程道乗りが遠う……とう云う者で御一所に御出  
になり升た……」と尋ねるのは最もです……そこで辻は些いやく  
それは御最もなる御尋……實は拙者此讃岐に参り音に名高き象  
頭山琴平神社に参詣なし、茶店に暫時休息を成して居りし處へ  
是なる日本氏が御出に相成り……何れへ御越でござるこの事故  
に拙者は是より御當家の御指南番堀先生の御高名を承りて一本  
御教授を願ひに参ると申候、然ると此日本氏も是はとうも拙者  
も堀先生の許へ参るのである……左様なれば御一所に御全道致  
うと云う事になり、夫れ故水戸の者と長崎の丸山の方と、一所  
に御全道仕り升たる次第……」と味くごまかし升た……近左様で  
ござるか……成程それで相分り升た……然らば道場へ御通なさ  
い……」と是から全道して道場へ通つて参り升た……それで支度  
し升た……最も其時分は三代將軍の御時世で武藝は誠に盛んで

したから……中々あんなに今の様に、面と申し升て金を以て綱  
の様にしてある者はない……お小手やかか、お胴だとか、モ一  
いろくの道具が有り升……彼れは八代將軍宮宗公の時分から  
出来升た者で……あんな者を付て稽古する時には討たれたかて  
別にいたくも何ともない……」お面だ……一本……」かすり升た……  
充分に討てるんだけれども、一寸耐上がぬいと、直さにかす  
り升た……てなことを云う……夫れはつまりあんな面を付てる者  
ですから答へない……それが又木劍なればこそ……かすり升た  
……と云うていられるけれども……真劍であつたら……かすり  
升た……てな事云うてる間だに切れてしまひ升から、何にもな  
りませぬ……ア、切れ升た……てな事を云うていられ升せん……  
其時分には、地皮と申付てうれで後ろ鉢巻してる丈けで……お  
小手やの御胴てな者は何にもありませぬ……だから一つ討たれ



ると、少し位は討たれたので、中々答へ升から、かす升た  
てな事は云うていられ升せん……だから一生懸命にやり升……  
中々三代様の御世には一番武藝が盛んでした……徳川は三代で  
智仁勇揃ったと申升……初代の家康公は智を以て天下をお納め  
になり升た……二代の秀忠公は仁を以て天下をお納めに成り升  
た……三代の家光公は勇を以てお納めになり升た……と申升だ  
から三代様の時分には……とに角此の物生飛彈之守様を始め伊  
東一刀齋……其の門人に前名は御子神典膳……又是は小野善鬼  
を殺して後小野治郎右衛門と成られ升た……小野派一刀流の元  
祖です……是も三代様の御指南をする人です……それから又荒  
木又右衛門と云う名人また……宮本武蔵、或は關口彌太郎……  
鎮鎌の名人には山田治郎左衛門真龍軒……槍では高田又平……  
それから劍術では櫻井甚左衛門……馬では馬垣平九郎……悪人

でも由井正雪てな人も居り升た……中々其時分の武藝の盛んな  
事と云う者は實にモ一こう大なる者です……何しろ江戸表丈け  
で町道場が千軒から有つたと云う位ひですから……夫れで武藝  
の盛んなる事は知るべしです……假令どうでも大將が好きと来  
ている者ですから……どうしても違うのですなア……左れば今  
堀近常と立合升るのは辻文次郎の辻半平から前に出升た……其左  
様なれば御願ひ申升……「真よし」と云うので双方木劍を取つて、  
位ひ取りと云うのをする……モ一上手な人になると、そんなに  
ほんく討合いでも、位ひ取りで、大抵出来るかまた出来ぬか  
……直に腕前は分る者です……そこらは感心な者です……上手  
になると夫れ位ひの事はなくては成り升せん……なに劍術討り  
ではない……我々社會でも其通りです……モ一しやべらいでも  
すつと高座へ上ると……其の工合でやれるかやれぬか位ひの事



は能く分り升……夫れで位ひ取りをして向うの、腕前さへ分つたらモ一負てやろうのつもりです……やつと云うなり二た討三討打合升た……がモ一大抵分り升たから……モ一負てやつてもよからうと云うので……第十本目にモ一がらり竹刀を投げ捨て升て半参り升た……恐れ入り升た……腕に恐れ入り升てござり升……近恐れ入つたか……参つたか……中々郷侍士にしては大した者だ……先づ是位ひの腕前なれば今兩三年修行する時には身共遠く及ばん様に相成る……中々味い……」とすうく言うて……すると大道寺は何を吐かして、今でも遠く及ばんのだ……今兩三年修行したら身共遠く及ばんなれば、修行しない前に遠く及ばんと云う腕前を見せてやろう……と考へ升たする者ですから……猪ぢやないけれども辻が見ると大分に大道寺の鼻いさが荒い……から心配して……小さい聲で是れく大道寺

勝ちや行んよ……い、かい、かい……」と再三だめを押し升た……すると大道寺は大い、胸に有る胸に有る……」と云うてる者の何だか荒ううです……辻は大道寺の怒りの至つて氣の短かいのを知てる者ですから……此い、かい、い、かい……」と充分にだめを押し……大道寺は大丈夫だ胸に有る胸に有る此い、かい……大胸に有る……」と丸で溜飯か羽織の紐の様に胸に有る計り言てる……近サア日本氏貴殿と一本やろうか……大お相手を致す……」と立上り是も位ひ取りをする……大抵分り升た者ですから……いよく打合う事になり升た……すると中々胸にない……どうも大變な太刀先き、非常に荒いから……辻は心配し升た、あれ位ひ言てるのに胸に有る胸に有る計り言つて何にもならない、一寸も腕にありやしない……大道寺は負よう云う心な、一番二三年修行したら、よく成ると云う腕前を見せてや



ろうと云うのですから……荒い、何しろ柳生家の家老で腕に  
覺へは充分に有る人ですから、中々堀は叶わん……當り前の武  
者修行だと思つてるから、大變な遠いで……段々と堀は後へ下  
つて参り升た……仕舞に道場のはめの處迄で来てしまひ升た……  
道場の堀も弱り升た……する奴を充分に一つ大お面だ……一本  
……と云うなり烈しく一つ打ち升た……道が源太左衛門も答へ  
たから参つたと云へなかつた……餘り痛かつたので……すると  
大道寺があべこべに、がらり竹刀を投げ捨て……「参り升た  
……」己れがなぐつて置て参り升た……辻は是を見て昔しから、  
己れがなぐつて置て参り升た……てな事を云う劍術が有る者か  
と思つた……する間だに源太左衛門は怒り升た……己れがなぐ  
つて置乍ら……参り升た……と云う……こいつは人を馬鹿にす  
ると思ひ升たから、矢庭に組討だと云うなり、大道寺の日本に

武者振り付いて参り升た……する奴は大道寺に於て充分に向う  
へ、力を入れさして置て大ヤイツと云うなり、体を引外して置  
て、向うへ一つ突たから堪らない……源太左衛門は、見事に道  
場の真中へどんと倒れ升た……随分格恰の悪い者です……する  
と大道寺は是を見て大参り升た……恐れ入り升た……辻は是を  
見るなり、直ちに大道寺の手を取つて表へ一生懸命逃げ出し升  
た……すると道場の方では、近常倒れてしもて、ヨ一起き上ら  
ん……すると門人は是を見て驚き升た……△先生はどう遊ばし  
たんだい……△サアゆるう行儀がいゝな……△いねむつてお出  
でになるんだらう……△そんな馬鹿な事はある者か、△だつて  
をとなくうつひいてお出になる……△そんな事云うてんど尋  
て上げなきや行ぬ……△と一全の門人が先生の側へ寄つて参り升た  
……△先生々々どう遊ばし升た……先生……△と呼わり升た……







さそうな者ぢやないか……付き合ひに、いゝかいと云つた  
ら大丈夫だくと云つて、あんな大丈夫は何んにもならしない  
……胸に有る胸に有る……何の胸に有た者か……併し肝心の  
腕前はとうぢや大ううだな……あれ位ひなら……中々出来る方  
だからなア……先づ小太郎とは互角だろ……互角として見る  
と、堀の方は今迄でに假令一度でも真劍の勝負をしてるんだか  
ら、實地の経験がある、けれども小太郎の方は今迄でに未だ真  
劍の勝負した事がない……故にどうしても、イザ真劍となると  
工合が悪い……大ブーム違ひない……夫れぢや、先づ今日の試  
合には我々が負けたと云うて於て、中々未だ仇討はとて出来  
んから、モ一二三年修行せんと行かぬと云つて、歸る事にしよ  
……是から二人から相談をして歸つた事を申し升た……小太  
郎はモ一大丈夫でさると思つてたのです……夫れで楽しんでたので

すに、討てぬと云うので誠にかつかりし升た……併し仕方が  
ないから……小いやさうゆう事なら仕方がござい升せんから、  
今一度び修行さして頂き升……大やり損うては取返しが付ぬ  
……仇討の事故充分に出来る様にしてからでない、行かぬ……  
助太刀をして貰つて、な事では充分に仇討は出来ない、助太刀  
をしてもらつて仇討する様では面白くない、今迄劍術の修行し  
たる甲斐がないだろうと思ふ、依つて……力を落さぬと、今一と  
修行やるがよい……小有難う存じ升……夫れではさう云う事に  
お願ひ申し升……そこで久し振で歸國致し升たる次第でござり  
升から、一應村に歸り母の御機嫌を伺ひ度う存じ升……故就て  
はお館よりも、御土産の金子も頂戴致し居り升れば、此段御許  
しに預りとう存じ升……大それはよい事で有る遠慮なく行つて  
くるがいゝ、早く夫れでは行て早く歸つて來んと行かぬ……小豊



の間だは人目もござり升れば、夕方よりやつて頂き升……して直に歸つて参り升る……大夕方から行くか……そんなら、翌朝が幸ひ出船であるに依つて、今晚中に歸つて参り升る様に……小夫はモ一直きに歸つて参り升る……」と其日の夕方から小太郎は立派やかなる、装束は水戸のお館より拜領なしたる者……目計り頭巾を冠り……七年振りにて歸つて参り升た……源養村、何となく故郷かと思へばなつかしく我家の表口へ立止り升た、未だ霧ではあるけれど、田舎の事ですから夜に入ると誠に何んなう物淋しき様で……今内の様子を考へ升ると……ひいひい……と糸を操るの音がして居り升……誰もないか……誰かいたれば不都合と尙も様子を考へ升た……幸ひたれもない様ですから、小聲になり小お願ひ申升お願ひ申し升……」と呼升たするとやがて糸車の音が止つたと思ふと玄どなれ様でござり升

……と云うのは正しく母の聲、小ハイ手前でござり升る……是は御城内の旦那様でござり升るか……ハイ只今お開け申し升る……と言ひ乍ら今漸々表の戸をがらり押開け升た……並さゝら旦那様誠にむさくろしき破家へ、恐れ入り升てござり升……何か御用の義を承り升う……」と云う手を取て上座に押据へる並是はしたり旦那様、何とした御たわむれ……左様なる事は御免遊ばし升る様に……」と云う時小太郎國宗は冠つて居り升たる、頭巾を脱ぎ取り、少しく後ろに下つて小ハ、ア……母上誠に御壯健にあらせられ、恐悦至極に存じ奉り升る……並エー母上様と仰せられ升るのは……小お見忘れ遊ばしたか伴坊太郎でござり升……並エー坊太郎は……マア……是はしたり……」と掛寄りんと致し升たが……いや、左にあらせ……と考へ升た……のは仇討に出立の時には、仇の首を以て歸らねば親子の對面をせぬ



と云うてある者ですから……此ハムあのそなたは坊太郎かや  
……まあ、よく歸りやつた、歸つて来たからには、定めて仇  
の首を以て歸つたで有ろう……さあ、以て歸つたと有れば、  
早う見せてたも……」と云われ升た時には、今迄忘れて居り升た  
が……思ひ出して驚き升た……仇の首を以て歸らざれば、親子  
の對面をせぬと、云うて出たのですから、誠に當惑を致し升た  
……小ハ、ア如何にも左様は申したなれども……小太郎此度歸  
り升たるは、仇が討てるか討てざるか……水戸家の御指南番、  
柳生家の家老、大道寺平馬様の御供なして、歸り源太左衛門の腕  
前をお試しに相成り候處、今兩三年修行せざれば、仇討は出来  
ぬ、残念乍ら、今兩三年修行仕り、其上にて充分に仇討を致し  
度と存じ候、故それ迄の處御待下され度、仇の首を持歸らざれ  
ば、親子の對面を致さぬと云う約束に候へ共、久し振りにて立

歸り候事故、御機嫌をお伺ひ申候次第……何卒々々左様御承知  
下され度決して劍術を怠りしにあらせ、未だ修行の出来をして  
討てざるの次第、今一度立歸り首尾能く、敵の首を以歸る迄  
母上にも、御機嫌能御出被下度、御願申候……して又誠に是は  
御館より母への御土産にせよと、下し置れ候者故……お納めの  
程を願わしう存じ升並なにく何と云や、劍術の修行を怠つ  
た者でないと云やるのかへ……假令くちではそう云うても、夫  
れは言ひ譯である……かりそめにも將軍家の御指南番、日本一  
と云われた劍術の先生の許へ七年も、修行をし乍ら未だ、堀如  
きの侍士を討取る事が出来んと云のは、必を修行を怠たのに違  
いない……左様な者は親でもない、子でもない、七生迄の勘當  
である……なに、女でこゝろあれ、侍士の女房……源太左衛門  
如き奴を討取るのに、何しにうなたの手を借り升しう、妾一人



にて見事源太左衛門を討取り升る……して此金は假令お館より  
かは知らねども、其方如き者の手にふれたる者はけがらわしい  
……持て歸りや……」と云うなり件の金を取つて、坊太郎の前へ  
ちよと許りに投げ返し升た、是はと言う間だに、立上つて母親  
お辻、女乍らも坊太郎をどうと計りに突き倒し升た……なれど  
も坊太郎は仕方がないから……小ハ、ア誠に恐れ入り升た……  
左様なれば最う立歸り升るでござり升う……並エー早く歸りや  
……」と云うなり表へ突出して、戸をびつしやり……小ハ、ッ……  
……」と大地に両手を支へて、暫は涙に暮れ居り升が、其心の内  
は如何計り、内にはお辻も泣き倒れ聲も上げずに打伏して、夫  
れと云わねど、親子の身の上、誠に不便の至りにござり升……  
漸々立上りし小太郎は、かくては果ては果てと氣を取り直し、どう  
ぞ母上立歸る迄で、御機嫌能御出を願わしう存じ升ると人言を云

ひ乍ら振り返り、城下を差して立歸り升た……すると爰に大  
道寺と辻文次郎の二人は、どう云う工合で有ろうと坊太郎の跡  
より見へ隠れに尾て参り升た……すると件の始末ですから感心  
して、前に歸り升た……事は小太郎知らん者ですから……今大  
黒屋に歸つて参り、誠にをううなり升て恐れ入り升……只今立  
歸り升てござり升から……文ナ、早かつたの……どう云う事  
あつた……母は無事であつたか、お蔭様を以ち升て母は無事  
ござり升だが、残念乍ら、敵の首を以て歸りませなんだ故に、  
親でもない子でもない七生迄での堪當である勘當をされ升て  
ござり升る……大ブ、ムそれでは母に堪當されたか……いや、  
それは勘當でない、母は何とかして、早く仇討がさしたいと云  
うので、其方の氣をはげますが爲めに勘當されたので有るに依  
て、其積りで一日も早く勉強して、劍術の修行をなし、仇討を



せんければ相成らぬ……小有難う存じ升といよく翌朝九龜より乗船をして、再び江戸表へ歸つて参り升た……ここで大道寺は小太郎と共に木挽町の御邸へ歸り升た、辻は小石川のお館へ歸つて此事を申し升た……サア夫れから小太郎は親に勘當迄でされ升た者ですから、どうぞして早う仇討をしたい者と、今迄とは一層勉強致し升た……うれで、一心と云う者はぬらい者です、十五歳より六七とまた足掛三年の間は修行し升た、すると、十五歳の時ですら、互格でしたのですから、又夫れから三年の修行で餘程よく使へる様に、なり升た……だからモ一是なら、大丈夫と云うから、左様なら仇討と云うので……親源八郎が殺され升た日が、寛永二年八月十四日に讃州九龜在國分八幡の境内で有り升たから……年は替るけれども、全じ寛永の十八年八月十四日に群月命日になるから、場所も全じ國分八幡の境

内と云う事に決り升た……夫れで早速此事を大公義へ訴へ升た……それで大公義より生駒家へ御沙汰に成り升た……公儀の名代として、江州は小膳一萬六百卅石小堀遠江之守様が御出でに相成り升た……そこで一寸私しが申して置き升が……中々どの仇討でも、公義の御名代が御出でになるてな事はないのです……是は全く水戸家の御盡力に依るので……そこで柳生飛彈之守様と家老大道寺平馬です此兩人が、坊太郎の後見人となり助太刀と云う事になり升た……うれから水戸家よりは、中山備前之守様が御名代です……そこで水戸の御館はモ一御隠居遊ばして黄門となられ綱枝公に世を譲られ升た……それで……佐々木助三郎と渥美角之丞の二人を連れて四國御漫遊でござり升……小太郎仇討の時は讃州へ御立寄になつて、仇討に御立合になり升……サアいよく充分に支度が出来升たから……一同花々しく



御出立になつて、東海道をお上りになり京都より伏見大阪、大  
阪から船で四國へ御着に相成り升……最も道中は、僅か壹萬石  
位ひの木ノ葉大名では有り升る、けれども、かりそめにも公儀  
の御名代ですから、大した者です……エーよれつ、ホーよれつ  
エー下に下に……と云うので中々立派な者です……また生駒家  
に於升ては、公儀より、御沙汰になり升たる事ですから、堀を  
逃すてな事は到底出来ません……若しも堀が逃る様な事が有つ  
ては、一大事御家に係わるのですから、中々嚴重な者です……  
早くに源太左衛門を召され升て、篤と御申聞しになり升た……  
源太左衛門も仕方がないから……承知した……返り討はモ一仕  
方がない……返り討になつたら、小太郎の運の悪い……源太左  
衛門の悪運の強いので……ある……サア生駒家に於ては公儀御  
名代に不慮なる事が有つてはならぬと、夫々何れも支度充分に

手配を致し升た……いよく小太郎の一行は八月の七日に九龜  
へ着致し升た……御名代は御城内へ……御這入りになる……中  
山備前守様は、水戸の御館が御城下の新町三丁目、九龜屋久  
六方に御泊りですから、無據是に泊られ升た……是れは木賃  
宿です……中山様は災難です……柳生飛弾守様に大道寺平馬  
は城代家考生駒將監の邸へ御泊りになる、又小太郎は源養寺村  
源養寺へ泊る事になり升た……いよく是より坊太郎の小太郎  
仇討に及ぶと云うの一席……

○第十四席

時は寛永十八年八月十四日讃州九龜在國分八幡の境内には、竹  
やらいを結び廻し、生駒家の名代として城代家老生駒將監殿御  
出張に相成り、足輕は警固の役として百五十人、是は土屋甚五



左衛門指揮をなす、町奉行よりは大澤善太夫が下役共を連れて  
非常を戒めると云う、然るに今正面の方に御定紋付たる幕を張  
り御出張に相成りしは、大公儀の御名代の棧敷なり、また左  
側の棧敷には全ヒ幔幕を張り廻し、御出張にお成りしは、身に  
は茶色木綿のこくもつに、同じく木綿の帯をしめ、御出で遊ば  
したるは是ぞ前中納言光國卿なり、御側には中山備前守、辻  
文次郎なり、また此方の棧敷には柳生飛彈之守宗冬公、全ヒく  
家老大道寺平馬、纏いて向う側の棧敷の方には、生駒家の名代  
として生駒將監を始め、一同出張をなす……と云う……實に莫  
大なる者でござり升……中々小太郎は暗れの場所です……是丈  
けの事をして貰つて、若しもやり損じては、大變です……から  
一生懸命になつて、借て仇討はモ一夜明方に限つて、東西  
に分れ升て討つ者は東より出る討たれる者は西より出る……討

つ者は日天様を背負うて出る……また討たれる奴は西より東に  
向つて、日天様を向うにして出る……どうしても、日に向うた  
時には討仇計りでない、何でも叶わんそうです……やがて一番  
の太鼓が鳴ると、それで支度をする……二番の太鼓で盃をする  
……打切りと云う三番の太鼓で名乗りを上げて打合と云う事に  
決つてゐる……やがて一番の太鼓で支度は充分に出來升たから……  
二番の太鼓を待て盃をする、勝つて勝栗尉斗昆布……誠面目出度  
い者です……「討つ者も討たれる者も土器の、共に碎けて土く  
れとなる」と云う事がござり升……討つ者は金の盃です、たか  
ら是を投げて決して割れませぬ……討たれる方は土の奴で  
す……ほんどの土器ですから、投ると直に割れ升……討つ者は  
勝つて勝栗尉斗昆布にひと切れの香の物です……是は人を切ると  
云う、意味でひと切れ、又討たれる方は三切れ……身を切られ



ると云う意味で三切れ……それに肴はと申升……このしろと云う肴です、彼れは御案内の通り小骨の多い肴ですから鱧と一所で身を細かく切らんと喰われません……だから身を細かく切られる様にこのしろの肴で……いよ／＼盃が済み升と第三番の切上げ太鼓、是がモ一打切りです、うれで東西の溜から土臺に上がる、土臺は二間に四間に決つてる、何でも人間に生れ升ると始りからちやんと決つてる……ぎやつと生れるのが、二寸と四寸からです、死ぬと、二尺と四尺の箱の中に入ります……夫れから地獄へ行くか極楽へ行くか、どちらへ行ても地獄極楽は二四に有ると申升からな……講釋師はぬらい事を知て升……今東の溜りから上つて参り升たるのは是を正しく今日父の仇討とせんと云う、孝子田宮坊太郎、當時名前を改めたる田宮小太郎國宗、當年積つて十七歳……身には下へ鎖り帷子と云うのを一着な

して、上には白羽二重の切り作天、白縮緬の帯を堅くめて脚絆手甲は申す迄もなく、足装束も充分嚴重にして、大劍は先年生駒の太守より拜領なしたる、正宗十哲の一人彦四郎貞宗の銘刀二尺八寸、小刀は水戸の御館より拜領なしたる、越中之國の住人左衛門三郎左文司の銘刀一尺二寸を帯し、ゆう然として、土臺に現われ升た……時には常陸山か梅の谷が土俵に上つた様な者で數萬の見物は、わあ／＼と云う聲がとよめき渡つて、暫し鳴も止まざる有様、すると西の溜りより上り升たは、是ぞ余人ならん、小太郎の敵と云われる、當生駒家の御指南番無敵流の名入、四國にて鬼神と云われし、堀源太左衛門近常です……装束は身には黒羽二重の紋付きに、仙臺平の袴は充分に股立ちを高く取り上げ、たすき十字に綾取り、白綾たよんで後ろ鉢巻も足装束も嚴重なしたり、大劍は小太郎の父源八郎を殺せし



時の刀なり、井上近江之守新海の鍛いし樂物三尺二寸の強刀で  
す、それで互ひに双方より名乗りを上る迄、足輕が六尺棒を以  
て、胸板の處へ十文字に止めてる、其名乗りが済むと夫れを擲  
うと云う……何れも尋常の勝負ですから……小やわ珍らしや源  
太左衛門近常、斯く云う某しは今より十七年前、則ち寛永の二  
年、今月今日當八幡宮の境内に於て、我父田宮源八郎を卑怯の  
刃に掛けて、殺害に及びしを以て、俱父觀天の父の仇、朋友兄  
弟の仇は兵を返させと云う、爰で逢たは香輦か、温純率の花咲  
くよりも、珍らしく、いで御父上仇、卑怯の振舞ひを成しては  
相成らん、いで……立上つて尋常の勝負をしる……  
そこで私しが一寸お断り申して置き升が……今小太郎の名乗  
りに立上つて尋常の勝負をしると申し升た、尋常の勝負をし  
ろは分つて居り升が……立上つてでござり升……是はモ一立

上つてと云わいでもよいのですけれども、この仇討でも皆、  
云う文句は決つて居るので……だから立上つてと云わぬと何  
だか仇討の名乗りにならぬ様です……だから申上げ升……最  
是は立上つてと申すのは、先例があるからです……夫れは彼の  
仇討の元祖と云う譯ではないのですけれども、先づ仇討の始  
りでしよ安元二年の神無月中の八日に伊豆之國は赤澤山の山  
嶺き柏が峠と云う處にて、工藤左衛門祐常の爲りに殺され升  
た、川津三郎祐安……其人の伴は一萬丸に箱玉丸、後に五郎  
十郎となつて十八年の天津風難義をして漸々吹戻したる建久  
の四年五月廿八日に、右幕下頼朝公富士の裾野に於て、巻狩  
を遊ばず、其時に仇討を致し升た……其時には仇の工藤は狩  
家で寝て居り升た、寝ている儘で首を取るのには借しいから  
と云うので起し升た……のです時に二人やわ珍らしや工藤祐常



爰で逢たは香華か、温純華の花吹くよりも珍らしく、斯く云う某しに於ては過つる安元二年の神無月中八日、赤澤山の山嶺に柏が時々に於て、討たれたる河津三郎祐安の忘れがたみ、十郎祐成五郎時宗にて候うぞ……いで十八年が天津風飄難苦勞をなし、吹戻したる今月今日いで……御父上の仇、申法なる振舞を成しては相成らん、立上つて勝負をしろ……」と爰で癡ていたから立上つて勝負をしろと申したのです……夫れが仇討の例になつて、立上つてゐるのに立上つて勝負をしろと申し升……別段に仇討には限りません、何でも其通りですな……魯生でも高座上つて講釋を讀み升の……エー一席申上るお話しは……と申し升……上に乗つてゐるのですから、申し上るものでない、御客様に申し下げるのです……けれども夫れが妙な者で申し下げ升るお話しは……とは云われません……夫

れと是れと全し事ですと私しは考へ升……併し餘餘に移り升て恐れ入り升……が先づそう云う譯です……  
借て今小太郎が名乗り升たから、源太左衛門も仕方がない……やあ仇討とはしやらくさい……と芝居ならそう云うなんですけれどども……正かそんな事は云ひ升まい……近如何にも田宮源八郎は、武士道の意氣地に依て討取つたり、敵討とはけなげなりいで尋常の勝負を致さん……と云う名乗が濟むなり、足輕が六尺棒を拂うなり、双方抜き合すなりと云う……誠に是は早うござり升……「小やっ」と云うなり切り込んで来る……奴を源太左衛門も去る者ですから心得たりと是を受る、小太郎は一生懸命兼て金比羅を祈つて居り升から、心の内では充分に何卒仇討をさせ給へと祈り念じて居り升る……源太左衛門も未だ小太郎が若年でござり升るから、そんなに出來るとは思っていない者ですか



ら……苦もなく返り討にする積りで居り升たが……中々到底返  
り討處ではない……大した腕前ですから……驚き升た……堪ら  
ん者ですからモ、こうなると、あなとつていられませんか……必  
死の働きです……双方は……ちやん／＼ちやりん……と十八合  
計りも打合升たが何と云うても一方は十八万石の御指南番無敵  
流の使ひ手、四國の鬼神ですから……容易に打取る事が出来ま  
せん……けれども一方も假令年は行かないでも長年の間だ、一  
生懸命修行致し升たる事ですから……中々是れも大した者です  
……双方名人と名人の真劍勝負……一同の御立合の方は申す迄  
でもなく、如何なる勝負になるならんと、見物一同の者に至る  
迄で手に汗を握り、片づを呑んで控へて居り升た……源太左衛  
門が打込めば……引外して置て小太郎切り込む、すかさ近常  
は是を受る……一上一下、上段下段火花を散して戦ひ升た……

する間だに小太郎は斯くては果てしと思ひ升たから小太郎一  
切り付け升た奴は……源太左衛門受た積りでしたか受け損じた  
者を見て、其甲を割付けられ升た……堪らんから後へたしく  
と下り升る奴を、すかさ横に拂ひ升たから、道の源太  
左衛門もしりへに胴と計り倒れ升た……だから小太郎は小己れ  
つ親の敵思ひ知れつ……と云うなり早くも首を上げ升た……し  
て早速小太郎は御名代御一同に一禮致し升た……だから一同は  
是を見てやんやとお褒めになり升たは實に、暫しは天地もくつ  
がへるかと思ふ斗りです……時に源養寺の住職林山和尚は母親  
お辻を連れてうれへ参り、生駒將監殿に御挨拶が有つて、一同  
御休息の上御引上げになるのを待て、小太郎を連れ早速源養寺  
へ歸り升た……直に堀の首を洗つて、父源八郎の墓所へ手向け  
る、林山和尚は是に回向を致され升た、夫れから、源八郎の十



七回忌ですから施餓鬼をされ升た……續いて源太左衛門の吊ひも和尚は充分に致され升た……誠に源太左衛門も仕合せで御座り升……夫れで直に小太郎は母に勘當を許して貰ひ升て……象頭山琴平神社に御禮参りをなし……一同御名代の御宿所へ改めて御禮廻りを致し升た……夫れで一同御名代は夫れくお歸りになる……そこで生駒家に於升ては堀が討たれてしまひ升るから……跡の指南番がない……だから假令年は行かいても、大した腕前ですから、小太郎を當家へ召抱へて指南番にしたらどうで、あろうと仰せられ升た……すると一同は皆賛成し升たから早速此事を、小太郎の方へ申し使わされ升たが……小太郎の方は母の在世の間は……主取りをしないと云う、決心ですから宜敷御断り申升ると云うので断つて仕舞升た……だから誠に彼れ位びの者を浪人さして置くは惜しき者である……と仰せられ

升たが仕方がない……すると爰に御城代家老に於き升てはお考へになり升た……どうも十八萬石の家中に指南番がなくては、實に不都合であるから、と内々小太郎を呼んで、いろくと仰せられ升たが……どうしても主取りは仕り升せんと、云うで承知しない……食祿に望みが有るならば、如何程でも遣と仰せられ升たが……決して左様にあらせと御断り申升た……うんなら仕方がない依て……一層道場でも開いたら……どうである云われ升た……すると、大變なる御城代は恩人ですから、夫れも厭とは人情としていわれぬ……元々小太郎は江戸へ行く積りですけれども、母がどうでも此の地を立つのが厭であると云われ升るから、仕方がない……孝行なる小太郎ですから母一人打捨置て江戸へ行てしまふと云う譯には行かぬ……だから母の亡くなられ升る迄では、こちらにいねばならぬ……だから誠に御心



配を相掛申して相濟みませぬ、左様なれば當所に於て何れにか  
道場を開かして頂きましよと、漸々道場開きを承諾致し升た……  
そこで萬事御城代の御世話で、武者小路の角へ立派なる道場を  
設へ升て、いよ／＼田宮小太郎國宗柳生流の指南をすると云う  
母親始め林山和尚土屋甚五左衛門も、大變悦び升た……江戸表  
小石川様、柳生家にも早速此事を通知に及び升た……サア夫れ  
からどうも田宮の道場は大變な勢ひ……十八萬石生駒家の家中  
の方々は皆、是へ稽古に御出でなると云う……夫れが爲め生駒  
家よりお捨扶持として二百石下され升た……是は皆稽古に来る  
人の禮の外に二百石ですから、結構な者です、夫れもお捨扶持  
です故に勤めも何にもせいでいゝです……氣樂な者です……  
誠に都合よく行て参り升た……すると或る一日の事です、田宮  
の道場へ一人参り升た者がござり升た……

○第十五席

エ！お願ひ申し升、お願ひ申し升……と訪う聲が致し升から……  
下男の重助は夫れ出て重へい誰方様で……と見ると夫れはく  
どうも乞食全然……身に黒の羽二重の着物だったのが……今ち  
や赤の羽二重と變色して白の紋付が黒の紋付さになつてる、  
もと正宗着物と云う、さわる切れると云う實にどうも、危険千  
万な者で……重助御ていねいに帯を見ると丸で帯だか帯だか分  
らない……所々にしんが出ている、齒抜けの爺さんが梨子を喰  
つた様に所々にしんが出ている、猫の百ひろか、あらめの行列と  
云う……うれて尻の切れた草履をはいて……刀と云へば鞘はは  
げて……モ！割れてる……是を一名笛刀と稱へる……風が吹く  
と鞘が割れてるから、風がこもつて、ビツ……と鳴る、だから



一名笛刀と云う、最も中は竹光に違ひない、是でも侍士は侍士  
だけれども、ほんとの乞食侍士と云う奴ですから取次に出升た  
る重助は重これ、今時分に出て来てもお餘りはないよ……  
侍士いぬ、決して拙者は袖乞物貰ひにあらせ……拙者は備前之  
國は御野之郡岡山の浪人、數年前より武藝修行に歩き居り升た  
る處、此四國地へ参り候てより、病に罹り誠に難澁を致し、斯  
く見る陸もなき、お葉打枯らしたる姿に相成り、今更此姿にて  
國元に歸る事もならせ、實に途方に暮れ居り升る……物……幸  
ひ御情深い先生の御高名を承り、夫れ故推参仕り升たる次第、  
假令水汲み掃除番にても苦しうござい升んに依て、御使ひ下さ  
れ升らなれば、有難う存じ升……侍士の情、宜敷御取次に預り  
どう存じ升……重御名前は何と云う……侍名前は其の齋藤徳之  
進と申し升る……重夫れでは暫く待てお出で……先生只今是

やで……どうも汚ない奴が参り升た……假令水汲み道場掃除  
番でもよい故に使つてくれと申し升……旦那に夫れは氣の毒  
です……左様なれば其方を取次でくれ升る様……是へていちよ  
うにせんと相成らん……重それぢやあんな乞食侍士を旦那令風  
体は悪くとも侍士は侍士、決して左様な事を申する者にあら  
せ……苦うない是へ御案内をしろ……下男は内の先生は未だ年の  
若いくせに物好きだなア……と思ひ升たが、仕様がな……不  
承ぶしよに今立關に参り升て……重サア夫れぢや此方へ御通り  
なさ……と奥へ連れて参り升た……少ハ、ア齋藤徳之進と申  
する御方は御貴殿でござり升るか……サア、くつとこつちへ  
お通りなさい……御遠慮には及ばぬ……拙者が田宮小太郎と申  
する者でござり升る……眞誠に難澁を致し居り升て、何とも詮  
方なく苦し紛れに御厄介なる事をお願ひ申し……何とも申し様



もござり升せぬ……田誠は御氣の毒なる事……武士は相見互ひ  
と申する事も有れば、及ばせ乍ら御世話申す先づ當道場に御滞  
在われ……誠には有難き仕合せに存じ奉り升る……田これ  
誰か拙者の若物を以て……と若物を取寄せて、之を若せる……  
だから誠に齋藤は悦び升た……サア是からと云う者は、モ一  
生懸命水汲みから、道場の掃除、使ひ歩き、何から何迄で  
下男のする事は皆して、それで少しでもひまがあると直きに道  
場へ参り升て……稽古を見ている……餘り熱心ですから……他の  
門人が……門是れく齋藤貴様は武藝は好きか……登へい大變  
好きでござり升……門少しは使へるか……登中々使へると云う  
程の事ではござりません……門好きならば一本教へやろう……  
からは是へ出て来い……誰にお教へになり升……門誰に教へに  
なるて、其方に教へてやるのである……登是はどうも御親類は

忝う存じ升か……夫れには及びません……門夫れには及ばんと  
は何だ……登中々遠く及びませんと申し升ので……門夫れは遠  
く及ばんのは分つてる……だから和かく教へてやるから……「い  
ねく夫れが間違つてるのです……門何が間違つてる……登遠  
く及ばんと申升のは、私がちやないので……へへへあなた  
遠く及ばんので……登なに拙者が遠く及ばんとは何だ……是  
は又怪しからん事を申すではないか……すると貴様はちつと使  
へると見へるの……登いねちつとは使へません……澤山使ひ升  
門なに澤山使ひ……よし左様なればどれ位使ひ使うかは存せぬ  
ども夫れぢや一本参れつ……登左様なればお相手を仕り升う……  
……といよく立合事になり升た……やつと云うなりぼん  
くぼんと思つたと思つた……どうも腕に答へた中村は……是  
はいかんと思つてる間だに登左様なれば今お面を一つ討ち升せ……



「と云ひ乍ら……やつと一つお面を討つた……どうも中村い  
たかつたなんて……中参り升た……く……恐れ入り升た……  
齊だから申して居り升のに……今お面を討ち升と申してい升た  
のに……中こりや恐れ入つた……中々齋藤貴様は強いなア……  
齊なにく私しは決して強いのでは有りません……あなたが弱  
いのです……私しは弱いのですけれどもあなたも、弱すぎ升の  
で……中々に弱すぎる……とは餘りひどいぢやないかい……齊だ  
つてそうです……私などは中々劍術使うとは、とても申され升  
せぬ……未だひねくり廻し升ので……まああなたは劍術のまね  
を遊ばすので……中々劍術を使ふと思ふと餘程骨が折れ升から  
ねへ……」と云う者ですから……一同は皆今々しいと思つて  
我れもくと討合つて見升げれども誰一人勝てる者がなだか  
ら小太郎は此の事を聞て感心致し升た……それから後は皆齋藤

齋藤と云うので誠に齋藤をかもうてやる様になり升た……する  
と或る一日の事でござり升た……小太郎は、少し風邪で身体  
の工合が悪うござり升から……宵から酒を飲んで休んで居り升た  
……家内の人は皆何れへ参り升たか不在でござり升た……すると  
其晩に道場へ盗人が這入升た……此盗人は餘程勝手を知らる奴  
と見へ升て……今奥の座敷へ忍び込んで参り升た……すると敷  
帳が釣つて有り升た……敷帳の中に小太郎國宗が寝て居り升る……  
件の曲者は長物を引抜て参り升るのに今行燈の燈火が有つては  
面倒だと充分に今敷帳の中の様子を見て……ふつと消してしま  
い升た……それで今敷帳越しに切り付け升た……すると此盗人  
は金を取りに来た盗人でない、田宮小太郎の命を取りに来た盗  
人です……曲者は充分に切り付た積りでしたか……彼の時早く  
此の時をそく、小太郎國宗はがばと斗りに刻ね起き升た……曲



者は南無三寶仕損じたりと、再び切り付んとする時には、小太郎早くも枕を取つて、やつと云うなり曲者の真甲臨んで打付け升た……あつと云うなり、倒とする……早くも足をすくうて取て押へ升たは、道が小太郎、曲者も中々腕に懸への有る者ですけれども、苦もなく取ぞ押へ升た……さやあ、誰か有る、齋藤はあらざるか……燈火を以て……火を以て齋藤は居らざるや……と申し升た……すると此の物音を聞て、最前からぶるや振うてそり升た下男、重助、曲者はどうやら召捕られたる様子ですから……やれくと云うので、火を以て恐る、夫れへ出て参り升た……併し是は曲者の誤りです……先づ此曲者は小太郎の命を取りに来たのですから、今小太郎が蚊帳の内に寐ていたのなれば、幸ひですから……第一番に蚊帳の釣手を切つて落すとよいのでした……モ、どれ位ひの名人でも蚊帳の中に寝て

いて釣手を切つて落されると、叶わん……身体が自由にならんから……夫れに蚊帳越しでやつた者ですから……行ない……のです……蚊帳の中でしたら釣手を切り落すに限るんです……だからあなた方でも若しも盗人にお道入りになるのでしたら……まあそんな事は有り升んけれども……若しお道入りになるのでしたら、でしたらです、でしたら蚊帳の釣手を落すに限る……併しそんな事を遊ばして知れる……必し是は知れるに決つてる者です……天網かい、疎にしてもらさる……と云う事も有り升りから知れる、知れてからは是は講釋師の魯生がそう言つたから……やう升たてな事を云われては困り升りから……何でしないに限る升、悪い事して夫れが首尾能く成就する者ならば、私しでも、そりややう升けれども……中々夫れが知れぬには置かね……小太郎は今曲者の冠つて居り升る頭巾を取て見ると、なに齋藤



が来ない筈です……此曲者は齋藤なんです……小やあ齋藤ぢや  
ないか……齊藤れ入り升たモ一斯く召捕られるからには、是非  
に及びませぬ……何をお隠し申し升う……備前の國は御濃那岡  
山の浪人と申し齋藤徳之進と申すは、まつかいな偽り誠は同國  
高松の家の中堀大之進の家来にして、松川秀之助と申す者……  
此間だ御貴殿は親の敵であるとして、彼の國分八幡の境内に於て  
堀源太左衛門近常をお討取りに相成り候、其の堀近常は我主人  
の兄にして、假令田宮小太郎は親の仇討をなしたる者にもせよ  
……我が爲めには兄の仇であると申され、私より夫れは又敵で  
あると如何程申升ても御聞き入れなく……逆なる事とは知り乍  
ら、主人のなげかれ升るを見るに忍びせ……何分にも主人は病  
身故に討つ事出来せと云われ候が……實に聞に堪へせ……故に  
齋藤徳之進と名を偽わり御當家に入り込升たる次第、故に假令

私しの身体は一寸だめし五分だめし、なより殺しになり升ても  
少しも恨みとは、思ひ申させ……何卒主人の命計りは御助けに  
預り度此段偏へに御願申上る……といつゝ詮言に及び升た  
……小フームそう云う事であるか……いや、左様なれば小太  
郎少しく考へる事あり……なにく其方に於ては中々感ざる者  
である、主人は如何様に相成ても苦しからせ……我命をお助け  
に預り度と申する者であるに、我は殺されても苦しからせ……  
主人を助けて下されと云う實に感心なる者である……左様なれ  
ば其方は高松へ送り使わすで有る……是から小太郎は手紙を  
認めて松川に渡し升た……其手紙の文句は  
拜呈陳ば貴殿は拙者に對して仇討せんの御心と承り誠に驚き  
入り候、何分にも御承知之通り我爲めには父の仇討を致し候  
事故、貴殿より仇討とあるからは、又敵と申する者、又敵さ



は天下の御法度に有是、依つて向後は左様なる事は御断念に預り度、爰に使を以て申入候、尙此上は不肖なる者には候へ共亡き兄君に替へて兄弟の約をお結ひ下され候なれば、如何計りか悦ばしく此段御依頼申入候早々謹言

堀大之進殿

田宮小太郎國宗

と斯かる手紙を以して使わし升たから、堀大之進は非常に驚き升た……成程考へて見ると、是はどこ迄も又敵きです……今更た此の松田を助けて返すと云う田宮の大量に感心し升た……中々大抵の者なら殺してしまふ、是を助けると云うのは餘程の器量の人故何卒そう云う人と兄弟になれれば結構なり、悪き兄を失ない……返つてよき兄を得たる様な者である……夫れでは一

第十六席

應讚岐に参り田宮殿に面會せんと、いよ／＼丸龜に参り升て、此小太郎と兄弟の約束を致し升と云う、夫れよりしていよ／＼田宮の後日に係り升……

爰に丸龜の家中に岩村宗助と申しまする、二百石取りの近習役を勤めて居られ升……人が有り升……すると此岩村の妹にお春と申升る、當年取つて十七才……生れ付ての美人です……是らそ天性の美人と云う……實に其美しい事と云う者は、沈魚落馬、羨花、閉月と云う、小野の小町か照手の姫か、見ぬ厨土の揚氣妃か、普賢菩薩の再來か、常盤御前か袈裟御前、お晝御前か夕飯かど云う、實にどうも早や従一位勳一等公府美人と云う古今獨歩、珍無類と云う、大日本は申す迄でもなく、唐天竺は



をろか、歐米各國を探しても、是位ひな美人は又と一人も有る  
まゝ……と云う位ひ……實に大した者です……だから十八萬石  
の家中では大評判です……賭所より……縁邊の事を申込で来る  
のです……けれども、皆未だ断つて居られ升……すると爰に岩  
村の隣郎は百五十石の馬廻り役を勤むる、赤川治助と云う者が  
ある……是は元と堀の門人であつて、二百石貰つていた奴です  
……夫れが今では酒の爲めに失策して、五十石丈け食録を上  
取り上られ升た……うこで此赤川は大變好色家です……折々は  
隣同志の事ですから顔を見合す事がある……する者ですから……  
いつしか此のお春さんに思ひを掛けた……赤川の最見ぢや、責  
めて男に生れたからは、あゝ云う女と只の一度でもよいに依つて  
枕を替して寝て見たいと云う、ほんのを起した、夫れで此赤  
川の顔はと云うと、不細工にも不細工にないので……顔になつ

てない、人遠化近と云う、何の事はない、内でのけの牡丹餅を一  
べん松の木之處へ……横に投げて、落た奴を下駄でふんで、そ  
れから算盤で押へて、器でなせたてな顔してる……みつ茶もえ  
くぼと云う事が有るけれども、此のみつ茶は恐らくなくば、ど  
は、いわれません……夫れ位ひな不細工な顔して、又是位ひな  
娘に惚れるてな……事はとても行く者でない……兎に角此の事  
を申入れて表向き申込んで見升たが……中々とても承知しませ  
ん……仕様がなから……赤川は此頃戀煩ひをした……馬鹿々  
々しい様です……今時の人間が考へて見ると、今時の人は戀  
煩するてな事はない、女だつて有りません……だから男は猶更  
です……今は女でも惚れると、モ一直接に談判をするなんてな  
者です……女どうです魯生さん私しはねへ、あなたの目鏡の掛  
けよりがいゝから、惚れ升たヨ……どうです、私しの云う事を



聞きませんか……聞かないでな事はありませぬ、据へ膳喰はぬは男の耻と云う事があり升……から聞きませぬ……嫌ですか……いよ……いよ……聞なきや私しは私し丈けの意見が有り升から……どんな事をするか知れませぬよ……だから、何か變つた事があつたら、私しだと思つて居て下さい……と仕舞には、そろく腕力に訴へるてな……大變な騒ぎです……そりやモ一戀煩ひ……また短冊の取替せで色事をするてな……弘法様の頭に鬻の有つた時分に流行つた……今時はそんなのは流行しない……儲て是からは赤川醫者にかよつた處が……とても直らぬ……どんな薬を呑んでも直らぬ者で中々困り升……夫れは直らない譯です、御醫者様でも有馬の湯でも、惚れた病ひは直りやせぬ、と云う事が都々一にも有り升から……どうしたら、かなう様になるだろう……といろく百計をあみ出し升た

こりや何でも附文に限ると考へ升た……から俄かに附文を認め升た……うれで或る一日の事でした、夕方に表に立つて居り升たら……夫れへ通りかゝり升たのが、隣娘お春の乳母です……だから赤川はしめたと思ひまして、お春の乳母に御出でになるは、お徳殿ではござらぬか……是は……誰方様かと思ひましたら赤川様でござり升たか……誠に御無禮を致しませ……赤いやく徳殿決して無禮にあらぬ……エ、爰で御目に掛るは何よりの幸ひ……さあ……此方へ御出あれ、おの何か御用事でござり升か……赤いやく用事と云う譯ではござらぬ……と赤川は今お徳の手を取て、門の傍の處へ連れて参り小聲になつて、赤川でもないが……拙者には少しく御貴殿に御頼み申たき事があるのである……何と聞てくれる譯には行くまいか……と、赤川は赤川様には改まつた其御言葉、どんな事かは存じませぬが、私